

## 論文翻訳

ジョン・E・ウィルス jr. 著

一七世紀および一八世紀の中国・台湾・  
バタヴィアにおける東インド会社と中国人

荒野泰典研究室

オランダ語中級ゼミ

### 【序】

オランダ語中級ゼミの成果として、オランダ人メイ  
リンク・ルーロフス編による論集 *DE VOC IN AZIË*,  
*Bussum, Unieboek, 1976* より、ジョン・E・ウィルス jr.  
による論文の翻訳を掲載する。

著者ウィルス jr. は中国と東インド会社の関係について  
研究している米国人であり、主著として *Pepper, Guns  
and Parleys; the Dutch East India Company and China,  
1662-1681* がある。本論は、一六〇三年に東インド会社  
が設立される以前から一七九四年の同会社による中国への  
最後の使節団の派遣までを簡潔に描いている。多岐にわた  
る史料を用い、かつオランダや米国での研究の成果を着実

に踏まえており、中国における東インド会社の活動の位置  
づけを知る上でも重要な研究である。

現在の日本においてはこの時期の東シナ海における日・  
中・蘭・西・葡間の関係の研究は充実してきたが、本論が  
書かれた一九七〇年代においては、こうした研究は始めら  
れたばかりであった。本論はその段階における同分野のオ  
ランダにおける研究を代表する論文として、永積洋子『近  
世初期の外交』（創文社、一九九三年）においても高く評  
価されている。

なお、論集全体についての解題、オランダ語中級ゼミに  
て本論を翻訳した経緯については、論文翻訳の後に掲載し  
た。ご参照いただきたい。

### 【凡例】

一、訳文は原文に忠実であるように努め、逐語訳に近い文  
体とした。

一、翻訳にあたり、原文中に（ ）および引用符を以て示  
してある部分は、訳文中においてそれぞれ（ ）およ  
び「 」を付して記した。また、訳者が補足した字句  
には「 」を付した。

一、訳文中の人名や役職名、地名などの固有名詞は漢字や  
カタカナを以て示し、人名は全員、役職名や地名は訳

ジョン・E・ウィルス Jr. 著 一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人（蘭ゼミ）

者において必要と認めた場合には「〜」を以て原綴を付けた。

一、原文中の注は訳文中では算用数字を用いて示してある。これに対し、注記を必要とする場合は訳注としてまとめて本論文翻訳の後に付し、訳文中の該当箇所にもローマ数字を以て記した。

一、原文中の注・参考文献については、訳文中では原綴のまま記し、その後には日本語翻訳版が刊行されている文献あるいは中国史・東南アジア史研究者の間で日本語訳が定着している文献には、「『』」および「〔 〕」にて示し、日本語翻訳のないものには、「〔 〕」にて仮訳を付した。

## 【目次】

### 最初の時期

澎湖諸島

台湾

期待と誤解、一六六二〜一六九〇年

バタヴィアの中国人

カントンスystemの中のアランダ人

最後の使節団

注

参考文献

訳注

付図

付図1 「中国地図（福州・北京間の使節団ルート）」

付図2 「東インド会社関係地図」

解題

翻訳の経緯

## 【翻訳】

### 最初の時期

もし、私たちがもつばら彼らの基本的な価値や観念に注目するならば、一七世紀および一八世紀の中国人とオランダ人は、世界で最もありそうにない友人たちであるに違いない。一方の民族は貿易を営むことが寄生的であると見なされる公式見解に固執し、もう一方の民族はそれで生活し、自ら誇りに思っていた。一方の国は巨大な官僚制を通して天子によって支配され、もう一方の国は彼らの支配者に対する反乱を成功させて成立し、世襲の総督に限られた権力のみを認めた。後期儒教の複雑で世俗的な道德主義に

対し、やむことのないカルヴァン派的な贖罪に対する熱狂がある。豪華で多様性に富む中国の寺院に対して、偶像のないカルヴァン派教会の質素な空間がある。

ここでいくらかの留保といくらかのより詳しい説明をしておくのがよいだろう。中国の公式見解は、中国の住民の幅広い階層で高度に発達した商魂を抑圧したり、隠したりすることはできなかった。オランダ人がかかわった中国人のほんのわずかな者のみが発達した儒教の知識人であり、関係したオランダ人の多くはせいぜい無関心なカルヴァン主義者であった。さらに私たちはこの種の間接関係を理解するために、価値や立場よりも社会構造、貿易実務、個人的な互いの関係などに注意を向ける必要がある。これらすべての要素は中国人とオランダ人との間で起こった争いの原因となったが、他方では、貿易、協力、友情とわずかな相互理解さえも可能にした。<sup>①</sup>

我が国で海域アジアについて語った最初のオランダ人は中国に行った経験があり、その国が世界のその部分ではきわめて重要な地位にあることを知っていた。ディルク・ヘリッツ「ゾーン」・ポンプ「Dirck Geritsz. Pomp」、別名「ディルク・シナ」(Dirck China)にとつて、それは、「黄金、宝石、あらゆる種類の絹が豊富で、考えられる限り地上で最も富んだ国」であった。中国人は、「すべての

ものをきわめて繊細に、そして正確に作ることでできる賢い人々」であった。<sup>②</sup>中国に一度も行ったことのないヤン・ヒューヘン・ファン・リンスホーテン「Jan Huygen van Linschoten」は、それに、より細々とした説明を付け加えた。「その国は多くの美しい大学、学舎、すなわち学校を有していた。中国では、何人も出身もしくは出自、富ではなく、学歴および学識によつてのみ尊敬し、敬われる。」<sup>③</sup>

中国の手工業者、商人はバンテン「Bantam」やその他の多くの南東アジアの港の繁栄に大きく貢献していた。スペインやポルトガルの国にとつて、アジアでは中国との貿易は非常に重要であった。一五九九年の旅行計画にすでに中国の名前があげられていることは驚くに値しない。中国への最初の旅は、東インド会社<sup>④</sup>の前身の一つである旧会社「Oude Compagnie」のためにヤコブ・ファン・ネック「Jacob van Neck」が一六〇一年に行った。<sup>⑤</sup>

しかし、その旅の始まりは偶然的でしかも悲劇的なものであった。ファン・ネックが強風のため、パタニ「Patani」へ行く旅の途中で北方に流された時、彼の二隻の船は、驚いたことに、マカオ「Macao」の「すべてスペイン風に作られた」大都市の眺望の中にいたのである。何人かが陸に派遣された。彼らが帰ってこないため、ファン・ネックは船を岸壁の下にもっと近付けるため、水路の深さを測る

小艇を送った。しかし、小艇は五隻のポルトガルのジャンク船に捕えられてしまった。そこで、オランダ人は秋の嵐の中、危険な未知の海に漕ぎ出した。手紙をマカオに運んでくれそうな中国のジャンク船さえも見つけることができず、捕らわれた者たちを解放するために他に何の手段も考えつかなかったため、彼らは進路をパタニに向けた。

後に残された二〇名の捕虜のうち一七名はポルトガル人によって処刑された。三名は馬拉ッカ（Malacca）に送られ、結局、その中の一名がオランダに帰着することができ、自分の経験を公表した。一六〇三年に、新しい東インド会社（連合東インド会社）の最初の船団のうちの二隻がマカオ付近で巨大なポルトガル船を拿捕することによって、このことの復讐がなされた。その船の積み荷は、一四〇万グルデン以上の価値があった。

一五九五年から一六〇五年まで、南東シナ（Zuidost-China）の商業都市には、皇帝の宮廷の代理人として、税収と自分たちの新しい揺すりの源を求める宦官がしばしば訪れた。外国貿易はそのような利益をもたらすことができたであろうから、宦官は、中国の外国貿易の官僚的組織の中に確固とした地位を有していないオランダ人のような外国人との貿易について、一般の役人以上に特別な規則を適用しがちであった。ある中国の史料は、さる宦官が

一六〇一年にオランダ人捕虜を尋問したことに言及している。しかし、宦官との交渉はきわめて不安定な仕事であった。というのは、賄賂が無駄になることがあり、宦官はしばしば自分の属する行政組織、商人、そして一般の人々からの激しい抵抗に遭ったためである。当然、これらすべてのことをヴェイブラント・ファン・ヴァールヴェイク（Wijbrand van Waerwijck）は知らなかった。彼が一六〇四年にパタニで、オランダと中国の間の貿易関係を構築するための最初の真剣な試みについて計画を立てていた時には。

パタニではファン・ヴァールヴェイクが三名の中国人を雇った。彼らはヴァールヴェイクに対し、もし、オランダ人が役人たちに対する贈り物として十分な資金を準備するならば、オランダ人が中国で貿易を行う許可が出るだろうと保証した。彼らは、福建省（de provincie Fukien）の海関の役人であった宦官の高案（Kao Ts'ai カオ・ツァイン）のことを考えていたようである。八月、オランダ人は福建の海岸と台湾（Taiwan）の間にある群島である澎湖諸島（de Pescadores）に到達した。多くの使者が往来した後、一〇月に宦官の信頼する使者がオランダ人に対し、宦官のもとにオランダ人の使者が派遣されるべきこと、さらに貿易を行うための許可を得るには少なくとも四万から五万レ

アルの費用がかかることを通告した。これらの法外な要求にもかかわらず、オランダ人は使者を派遣できるという希望を抱いた。しかし、オランダ人がそうする前に一人の中国人将官が五〇隻の戦鬪用ジャンク船からなる艦隊を率いて来航し、中国の領土に属している澎湖諸島から退去し、中国に属していない台湾へ行くよう要求した。彼が言うところによれば、中国商人は貿易を行うため確実に台湾へ行くであろうとのことだった。オランダ人が同地に適当な港を見つけることができなかった時、将官からは出航を命じられ、そして、ある商人からは、商人たちがバタニへ貿易に行くことと約束するので、オランダ人はバタニへ引き返すようにと強要された。オランダ人は、パタニから連れてきた中国人の仲介者のうちの何人かを中国の監獄に残した。少なくとも彼らのうちの一人は、オランダ人が澎湖諸島を占領することを支援したかどで死刑を宣告された。オランダ人は、ポルトガル人の影響力と資金力が自らの失敗に係属していたと聞いた。それは本当のことだったかもしれない。

しかし、貿易を許可するという先例がなかったという事実だけでも、中国の官僚たちが警戒するには十分であった。オランダ人がかつて許可なく中国の領土に上陸し、宦官や海外在住の中国人らと画策した時、彼らのチャンスは失われた。中国人は、台湾にオランダの港を置くという常識的

な解決策を提案した。しかし、オランダ人は二〇年間の欲求不満と衝突の後によりやくそれを受け入れることとなった。

一六〇七年、コルネリス・マートリーフ (Cornelis Matelieff) 指揮下の三隻の船が、再び広州 (Kanton) 周辺地域で貿易を行う許可を得ようとした。しかし、彼らは長い遅滞や困難と闘うこととなった。六隻のポルトガル船が脅迫的な態度を取り始めると、彼らは退却した。東インド会社はそれに続く一五年を主として香料諸島 (de Specerij-Eilanden) とジャワ (Java) における彼らの立場の強化にあてた。南東アジアの港において、中国の品物を手に入れるための努力は多くの成果を生まなかった。一つには、これらの商品を供給した中国商人たちが、胡椒や他の熱帯の産物の供給をめぐってオランダ人との激しい競争に巻き込まれていたからである。さらに重要なことは、中国商人たちが、彼らの商品のためのより豊かな取引市場をもっていたことである。それは自国により近い、スペインの港マニラであった。

### 澎湖諸島

一六一九年にバタヴィア (Batavia) が建設され、香料諸島におけるオランダ支配が確立した後、ヤン・ピーテル

ス「ゾーン」・クーン（Jan Pietersz. Coen）は、彼の途方もないエネルギーと意志の力をその他の地域におけるオランダ勢力の拡大に向けることができた。マカオとマニラを、またこれらの地における中国貿易を攻撃することによって、極東における敵の力は徐々に弱まっていき、中国貿易を部分的にバタヴィアに向けることができるはずである。一六一九年から一六二一年までのオランダによるマニラ封鎖で、数隻の中国ジャンク船が捕獲された。また、おそらく脅しがきいた船も何隻かはあっただろうが、多くの船は封鎖を通り抜けることができた。この長びく作戦よりオランダがはるかに好んだのは一度の向こう見ずな攻撃であった。もし、この攻撃が成功したなら、極東におけるヨーロッパの軍事的、商業的勢力の均衡を大きく変えたことであろう。一六二二年六月二四日、約八〇〇名からなるオランダ軍の兵団が一三隻の船からマカオ付近の海岸に上陸した。オランダ人の進軍は、偶然命中した弾が火薬樽の一つを爆破した後でさえも、順調であった。疲れが始め、ポルトガルの集中砲火にさらされるようになるまでは、彼らが船に退却しようとした時、ポルトガル人と大勢の酔っぱらった黒人奴隷たちが「サンチアゴ！」と叫びながら、彼らを追いかけた。そして、最初は秩序正しく行われていたオランダ人の退却は、秩序のないただの逃亡になってし

まった。オランダ人水夫たちは、パニックになった群衆のせいで転覆するのではないかという不安から、深い海にボートを漕ぎ出した。その結果、多くの者が溺死した。オランダ人は少なくとも一三六名を失い、約一三〇名が負傷した。ポルトガル人は中国人に彼らの軍事力の忘れがたい実例を見せつけたが、他方、オランダ人はその地域における彼らの攻撃的な志向を明白に示したのである。<sup>55</sup>

オランダの艦隊は、マカオで何が起ころうと航行を続け、澎湖諸島ないし台湾に強固な拠点を設立し、そこからマニラにおける中国貿易を妨害するようにとの命令を受けていた。中国当局との交渉は、なるべく早く始められなければならないかった。そしてオランダ人は、澎湖諸島ないし台湾で貿易を行うことが中国人に許可されるよう要求しなければならなかった。さらに彼らは、中国当局が中国の商人に対して東インド会社の許可証なしで航海することを禁ずることを要求しなければならなかった。これらの許可証は、もっぱらバタヴィアへの航海のために発行される。初期にはシヤムやカンボジアへの航海のためにも発行されることもありうる。もし、中国当局が拒んだり決定を延期しようとするならば、中国の船舶は攻撃され、中国沿岸部は可能な限り封鎖される。そして、拿捕されたジャンク船の船員は、強制労働者としてジャワないし香料諸島へ連行される。



この地域のアランダの司令官は、中立の船舶や中立地域を攻撃することは、中国人にアランダ人が非人間的で残忍であるとの確信を強める結果をもたらすだけである、という考えにすぐに至った。中国という国家は、南東アジアのいくつかの小さな沿岸国のように侮辱され、脅されるべきではなかった。しかしながら、これらすべてのことは、特にバタヴィアでは全く忘れられていた。そこでは職員の思考パターンが南東アジアで適用された戦略やそこで得られた経験に支配されていたからである。中国人には貿易を無理強いできるという意見は、一六六五年頃まで繰り返し表明された。

一六二二年七月、アランダ艦隊は澎湖諸島に到達した。短い偵察行の後、台湾の海岸には適した港がないことが判明したので、司令官たちは澎湖諸島に要塞を築くことを決めた。次いで八月に、アランダの要望を福建の当局に知らせるため、一隻の船が廈門（Amoy）地域に送られた。九月二九日に、福建の巡撫である商周祚（Shang Chou-tso シャン・チョウ・ツォ）の回答を下級官吏らが澎湖諸島にもたらした。彼らは、澎湖諸島は中国の領土であり、アランダ人はそこに滞在してはならないと述べた。商の書簡には、他の場所で貿易するための許可については全く言及されていないかった。アランダ人が戦争について話し始める

と、使者は、台湾の淡水（Tamsui）に貿易拠点を設立する許可が得られるかもしれないと試みに提案した。しかし、これはアランダ人の意に沿うものではなく、彼らは一〇月二日、戦争を始めることを決定した。アランダ人は一〇月と一一月に居住地で略奪を行い、廈門の入り江に停泊していたジャンク船を燃やした。一二月、まだその地域に駐留していたアランダ船隊の司令官は、艦隊が彼らを攻撃するために装備されたとの知らせを受けた。しかし、彼は同時に、アランダ人が澎湖諸島を去って他の場所に行くならアランダ人と貿易をするためのジャンク船を送るであろうとの商周祚の書簡を受け取った。

一六二二年末までに、澎湖諸島における司令官であるコルネリス・レイエルセン（Cornelis Reijersen）は、アランダ人の略奪は中国になんら重大な損害を与えておらず、中国人に貿易を強制することはできないという認識に至った。他方、商周祚は、アランダ人に台湾で貿易を行う許可を与えることによって、中国人の船団や軍隊を澎湖諸島に投入させることなく、アランダ人を同地から退去させることができるかと考えた。そこで、レイエルセンは商と一六二三年初めに福州（Fochow）で会談し、速やかに合意に達した。「合意の内容は」一人の官吏が澎湖諸島へ派遣され、その立会いのもとに要塞の象徴的なとりこわし

が開始される。この「とりこわし」は、中国商人が台湾でオランダ人と貿易を行う許可を与えること、および、オランダ人が適した港を探すのを助けるため中国人の水先案内人を使わせるように、との上奏とともに、北京（Peking）に報告される。オランダ人は、他の港が見つかるまで澎湖諸島にとどまることを許されるであろうが、それ以上は許されない（というものであった）。バタヴィアのオランダ当局にこの合意を承認させるため、直ちに中国の使節団がそこに派遣されることになっていた。商の統治下にある省から中国人が台湾に来て貿易を行うことを禁止すると商は約束したかもしれないが、それについての十分な証拠はない。

ともかく、一六二三年六月に商もレイエルセンも、彼らの上奏がそれぞれの上司によって拒絶されたということを聞いた。北京の宮廷はオランダ人と台湾で貿易を行う許可を中国商人に与えるという提案を断り、商がその提案を行ったということを理由に、彼をその職から解任した。北京は、おそらく廈門地域におけるオランダ人の襲撃を黙認する用意がなかったであろうし、ことによると澎湖諸島におけるとりこわしが見せかけであったという事実にも通じていた。おそらく、北京はオランダ船による広東（Kwangtung）沿岸の攻撃の通報も受けていたであろう。

この船はヴィレム・エイスブラントツ（ゾーン）・ボンテクー（Willem Jisbrantsz. Bontekoe）の指揮下にあった。

ボンテクーとその仲間はレイエルセンと中国当局の間の合意に関する中国の報告を信じようとせず、中国航路での攻撃を続けた。しばらく後で、彼らは、二五〇名を乗船させ、豊富に荷物を積んでマニラに向かっていたジャンク船を拿捕した。レイエルセンもまた六月にバタヴィアの当局から書簡を受け取った。その書簡は他の場所での貿易をするという中国との約束と引き換えに、澎湖諸島を明け渡してはならないと命じ、中国人がオランダの要求に同意しない場合には、より強硬な行動に移るよう勧告していた。そのすぐ後で、マニラに向かう途中のジャンク船を奪うことを目的として、広東と福建の間の境界地域を巡航するために四隻の船が澎湖諸島から出発した。八月に受け取られたその後の指令では、バタヴィアの当局はまず最初に中国商人が貿易を行うために来るという条件で、澎湖諸島を引き払う用意があったようである。モンズーンの風向きの変化によって足止めされた中国からの使者は一六二三年一月にようやくバタヴィアに到着したが、オランダ人の要求を緩和する状況ではなかった。彼らがより早く到着したとしても、彼らが交渉の中断を避けるために大いに寄与したということはおそらくないだろう。



今や双方は軍事的な準備を進めた。オランダ人は澎湖諸島に防衛施設を建設するため中国人捕虜を働かせ始めた。生き残った者は後にバタヴィアに輸送され、そこで、主な中国人居住民に割り当てられた。

中国当局はジャンク船の建造と沿岸防衛の強化を進めた。彼らは澎湖諸島への食糧および必需品の供給を断つため海外への渡航数を減らした。このことは中国人の意図に対するオランダ人の疑念を増した。オランダ人が澎湖諸島における防衛施設の作業を再開したことはオランダ人に対する中国人の不信を増大させた。六月に、一人の中国人使者が、表向きは、交渉再開を試みるために澎湖諸島に渡ってきた。しかし、この使節は、オランダの注意をそらし、オランダの立場の強さを調べる意味あいの方が強かったに違いない。レイエルセンは八月に廈門地域を訪問したが、中国当局が、澎湖諸島からの立ち退きとすべての中国人捕虜の解放を貿易関係の話し合いの条件とすることに固執し続けていることに気が付いた。彼らはこの場合、明らかにバタヴィアにおける中国貿易を考えており、台湾におけるものではなかった。この失望にもかかわらず、オランダ人は一〇月になお使節団を廈門に送った。しかし、彼らの船は、全く予期しなかったことに焼き討ち船の攻撃を受けた。今や、それ以上の交渉は不可能だった。だが、オランダ人

は海岸沿いに敵対行為を始めるにはわずかな人員と船舶しか割くことができなかった。一六二四年一月、二隻の船が澎湖諸島から派遣された。彼らは廈門南方の沿岸に、いくばくかの損害を与え、何人かを捕虜にした。

一六二四年二月、澎湖諸島の北方に四〇〇五〇隻の戦船用ジャンク船からなる中国艦隊が視認され、七月になる頃には北方の諸島が中国軍に占領された。七月三〇日には中国兵団が攻撃し、オランダの要塞があつた狭い半島を除いて、本島全体を征服した。オランダ人は今や水を断たれ、しかも、少なくとも五〇〇〇人はいいた中国人の兵力に比べて彼らは九〇〇人しかいなかった。ちょうど澎湖諸島に到着したオランダの新司令官マルティヌス・ソック〈Martinus Sonck〉は撤退について交渉し始めた。中国人司令官から、オランダ人が澎湖諸島から去るなら、中国商人が台湾でオランダ人と貿易することが許されるだろうという確約を得た後に、オランダ人は要塞を壊し始めた。その年の末ごろ、彼らは全面的に台湾に退却した。中国皇帝の政府が、台湾においてオランダ人と貿易するための正式な許可を一度でも与えたということはほばありえないようであるが、省当局はそのために必要な正式の証明書を発行し、時には関税まで課したようである。

## 台湾

台湾への退却は平和的な貿易の発展の時期につながるはずだった。しかし、そのためには、オランダ人は日本人ときわめて注意深く事を進めることが要求され、また、中国沿岸部の政治的、商業的状況を支配できず、多大な影響力を行使することもできないことを甘受しなければならなかった。台湾のオランダ人司令官は、最初の数年間はそのような慎重な政策をとることが全くできなかった。

一六二八年に任務に就いた若くて未熟な長官ピーテル・ヌイツ（Pieter Nuyts）は、彼の命をほとんど尽きさせ、台湾と日本におけるオランダ貿易をほぼ断絶させた日本人との争いの責を負わされた。実を言うと、日本人と中国人がオランダ人の到来以前にそこで貿易をしていたという事実にも関わらず、一六二五年、一六二六年、一六二七年に日本人により台湾へ運ばれた積み荷に関税をかけようとしたオランダの試みにより非常に危険になっていた状況を、彼は悪化させただけなのである。一六二八年、ヌイツはいくつかの点で事態を改善しようとしたが、一方で、彼はすべての日本のジャンク船の武器を取り上げて、彼らが出航したいと望んだ時にそれを拒否した。そのため、日本人はヌイツの家を取り囲み、彼らを出航させること、彼らに人質を同行させること、さらなる要求に従うことについてオ

ランダ評議会が同意するまで、彼と彼の息子の人質にとった。日本の当局は、この衝突に激怒したので平戸（Hirado）にいたオランダ人を逮捕した。彼らとの貿易を停止し、オランダ人が台湾から退去することを要求した。一六三〇年、彼らは取り決めたことを知らせてきたが、貿易が完全に復旧されたのは、一六三二年に当局に引き渡して刑期を勤めさせるためにヌイツが日本に送られた後のことであった。一六三二―一六三三年には、日本人は台湾へ渡航することを禁止され、一六三六年になる頃にはすべての日本の海上貿易が禁止された<sup>(8)</sup>。

中国人との問題は解決するのがより難しかった。彼らと友好的関係を保てず、安全な貿易を行えなければ、台湾のオランダの拠点はほとんど存在し得なかった。福建沿岸は二〇〇キロ以内の所にあり、同地で起きたあらゆる重要な政治的变化が台湾に影響を及ぼした。一七世紀の二〇年代には、明朝の長期にわたる衰退は、ついには国のいくつもの地域における公然とした戦争状態をもたらした。こうした混乱の中、福建沿岸で名を挙げた最も重要な軍人が、オランダ人には一官（Iguan）、あるいはニコラス一官という名で知られていた鄭芝龍（Cheng Chih-lung）という人物だった。彼は、澎湖諸島からのオランダ人の退去をめぐる交渉にいくばくかの役割を果たし、通訳や援軍の指揮官

として東インド会社のために働き、ついで、平戸（日本）で中国人の「カピテン」が死去して以後、その勢力の大部分を引き継いだ。鄭芝龍とその子孫は、八〇年代の初めまで台湾海峡におけるオランダ人の最も重要な貿易相手であり、後に最も重要な敵対勢力となった<sup>(vi)</sup>。

一六二七年、オランダ人は鄭芝龍との戦いにあたり、明の艦隊と同盟しようと試みたが、何も達成することはできなかった。一六二八年に鄭が不安定な支配を確立することに成功すると、オランダ人は鄭に不安定かつ疑い深く接近するようになった。しかし、オランダ人は、全ての商人が鄭と貿易するために来るのを鄭が認めなかったことに抗議し、今後は商人がオランダ人と貿易するのを妨げないこと、および、毎年大量の絹をオランダ人に売ることに同意するまで、鄭をオランダのヤハト船<sup>(vii)</sup>に閉じ込めた。その後、鄭はオランダ人を誰一人信用しなかったであろう。しかし彼は、一六二九年と一六三〇年に彼の敵に対する支援を求め、それを得た。オランダ人は鄭とその一派の貿易独占に抗議し続け、一六三三年に彼の艦隊を攻撃した。しかし彼らは金門島〈Quenoy〉付近の大戦で敗北した。一六三六年以降、鄭とオランダ人は再び平和的な貿易関係を結んだ。

現在、台北〈Taipei〉から「ゼーランドディア城」〈Castel Zeelandia〉があった場所であるタイオワン<sup>(ix)</sup>（Taiwan）へ

行く旅行者は、豊かな緑の風景を通るが、そこには多くの中国人の町と村があり、良質な米と野菜が生産されている。オランダ人が一六二〇年頃に目にしたタイオワンは、全く異なる様子であった。海岸に沿って、中国商人、海賊、漁師の小さな居住地があったが、住民の大部分はルソン島に居住する種族と言語・人種と文化がある程度類似する先住民から構成されていた。彼らは漁業・狩猟と原始的な農業によって生活しており、互いに遠く離れた村々に居住し、中心となる政治権力は全く存在していなかった。その低地の大部分は未開拓のままであり、鹿であふれていた。ゼーランドディアにいたオランダ人は、四つの大きな近隣の先住民の村に権力を及ぼし始め、じつに速やかに、さらに遠方にある彼らの敵と対抗するための彼らへの支援を始めた。一六三五年から一六三六年には、五〇〇人足らずからなるオランダの軍隊がその低地の支配を拡大し、この地域の外でさえも、多くの村と指導者たちが、オランダの統治を認めるのが賢明だと思うようになった。一六四二年、オランダ人は遠征の間に一六二六年からスペイン人が占領していた台湾北部の基隆〈Keelung〉の砦を戦い取った。そして一六四五年、オランダの兵士たちが基隆の近くの淡水からゼーランドディアに移動した際、多くの土着の村々が彼らに降伏した。一六四四年から一六四六年までこれらの村はす

べて、村の評議会、および、争いを調停し、オランダ人の公布を聞くための「長老たち」による毎年の集会（議会）とを持つ同じ統治形態を与えられた。このシステムにはオランダの町と州の行政構造の影響がはつきり見られる。その上、台湾はオランダ改革派教会にとって、東インド会社の管理下にあった派遣地域の中でまさに有望な数少ない地域の一つだった。一六三九年頃、ゼーランディアに最も近い村、シンカン（*Sinkan*）では印象的なカルヴァン派の儀式によって安息日が祝われた。別の村からの改宗者はしばしばシンカンに移された。本物の信仰によって新しい世代を育てるために、村の学校の体制には多くの注意が払われた。それにもかかわらず、教師たちの多くが熱帯性の熱病で亡くなるか、あるいは福音に導くべき人々を侮辱し、欺いた。<sup>⑩</sup>

オランダ人は一六四四年まで、さらにその後も毎年、五万から一〇万枚の鹿皮を台湾から輸出した。しかし、中国での貿易および台湾の中国人在住者による活動が最も大きな利益を上げた。オランダ人は、一六三五年以降台湾への中国人移民数が急激に増加したことに気付いた。その年にバタヴィア政庁がオランダの統治を拡大するため軍隊を派遣した際、それは次のようなヴィジョンを伴っていた。「ポルトガル人がかつてインドで持っていたような素晴ら

しい植民地―いかなる強力な支配者の管轄下にもなく、粗野で愚かな異教徒の住民が居住し、しかしながら、強大な中国王朝のすぐ近くに位置していて、そこから、人がある程度望むことができるほどの人数の、貧しくて勤勉な民衆が流れ込むような植民地」。<sup>⑪</sup> 中国の農業は、富裕な中国人が行った灌漑と干拓事業への投資に対する支援によってさらに拡大した。そのような者の中に、一六三六年から一六三九年まで台湾に在留し、バタヴィアにおける中国人の最初の指導者であった「カピテン・ベンコン」（*Capitein Bencon*）こと蘇鳴崗（*Su Ming-kang* シ・ミン・カン）がいた。おそらく、鄭芝龍や彼の仲間もそうだったであろう。彼は台湾の中国社会と多くの緊密な関係を持っていた。東インド会社は中国農民から砂糖を買い付け、それをインド、ペルシャ、さらにヨーロッパに売りつけた。会社は種々の税金を課し、これらの税金の多くは中国人徴税人によって徴収された。その他の中国人企業家は、さまざまな先住民の村での商売独占によって吊りあげられた高値により利益を得た。最も利益の上がった年では、中国社会に対するこれらの税金、課金は台湾における東インド会社の収入の約四〇パーセントを占め、中国との貿易による収入は残りの六〇パーセントとなった。四〇年代後半では台湾はアジアにおける東インド会社の拠点の中で最も利益を上

げる拠点の一つであった。香料の貿易による巨大な利益は、当然、ヨーロッパの会社の帳簿で光を放っていたことだろう。これらの収入を可能にした中国人移民の波は、困難と変革をもあわせてもたらし、ついには台湾におけるオランダ勢力の崩壊をもたらしこととなった。

一六四四年、明朝の衰退は大惨事をもたらした。反乱を起こした百姓軍は北京を占拠し、明の最後の皇帝は宮廷の敷地にある煤山で縊死した。この悲惨な出来事は無数の中国の歴史書で伝えられているだけでなく、カトリックの宣教師の記録とフォンデルス(Vondels)の「崇禎」(Zungchin)にまでも言及されている。<sup>⑫</sup>反乱者たちは新しい満州族の清朝の軍隊によって速やかに北京から追い払われた。決意には固いが、ほとんど上手く組織されていない、明朝へ忠実であり続けた反乱者の抵抗にもかかわらず、清朝は国家全土の征服を進めた。当初、福建の鄭芝龍は明の継承者の一人を支援していたが、その後、清側へついた。しかし、清は彼を北京で自宅監禁し、勢力を奪った。ヨーロッパ人に「国姓爺」(Coxinga)と呼ばれた彼の息子の鄭成功(Cheng Ch'eng-kung)は父と断絶し、一族の権力全てを自分の支配下に置いた。一六五一年頃、彼は明への忠誠を保っていた海軍の大半を、一つの恐るべき組織に統一した。その中心は厦門にあった。大陸では清の軍隊が徐々に彼の

軍隊を追い払ったが、彼の艦隊は急襲を行い、さらに遠くにある拠点を占拠した。そして、ついには一六五九年に彼は南京(Nanking)を攻撃するために巨大な艦隊で揚子江を遡上するに至った。ほぼ成功を収めかけた命がけの事業であり、それによって彼は清を倒すことができたかもしれない。そこでの敗北の後、彼は艦隊と軍隊のためにより安全で、よりよく備えのある退避場所を探さなければならず、そして、台湾がそのために最もふさわしい場所であることは明確であった。<sup>⑬</sup>

次第に強い力を持つていったこの脅威に対するオランダ人の対応は弱く、まとまりがなく、時には愚かだった。しかし、よりよい方策をとることにより、台湾がオランダのものであり続けたかどうかは全く確かではない。彼らが自分たちではどうすることもできない事態に巻き込まれることは予測できたであろう。つまり、清による中国南部と台湾の中国人居留地の占領である。一六五〇年頃、多くの中国人戦争難民が台湾に渡って来ており、中国人の人口はオランダ統治下において三五〇〇人から一万四〇〇〇人ないし一万五〇〇〇人までになった。五〇年代にさらに多くの避難民がやって来たが、当時の中国人の総人口に関する数字はない。これらの住民の多くは中国に彼らの家族を残していたので、五〇年代にはおよそ六〇〇〇人もの戦闘可



能な中国人が台湾にいたと思われるが、その一方で、オランダ駐屯軍は一〇〇〇人の兵士と、一〇〇〇人ないし二〇〇〇人の土着の増援部隊を擁していた。国姓爺の軍隊を考慮に入れなくとも、これは全く喜ばしくない状態だった。

台湾における中国人社会は、一〇人の指導者からなる評議会を通じて統治された。このシステムはおそらくオランダ人が来る前からすでに知られていた海賊の指導者と商人のリーダーたちによる評議会に由来するものであろう。これは、団体という手段を通じたオランダの統治システムとも一致する。良好な個人的な接触により何人かのオランダ人は、中国語や中国人の民間信仰を学ぶことができた。互いの利害にもとづく濃密なネットワークと経済的な合意が中国人指導者とオランダ人を結びつけた。これらはオランダ人の意に沿うような中国人だった。有能な手仕事職人、オランダ人が迷わず「ボルダー」と名付けた地域の灌漑や開発に投資する者もいた有能な商人たちである。渡ってきたばかりの中国人の大半とはそれほど友好的な関係はなかっただろう。

一六五二年、オランダの史料ではファイエット（Fayet）と呼ばれる、郭懷一（Kuo Huai-i、クオ・ファイ・イ）という者が中国人の指導者としてオランダ人に対抗して蜂起

した。報告書の一つによると、一〇人の中国人社会の指導者のうち七人がオランダ人に忠実であり続け、目前にせまった反乱を彼らに知らせた。およそ四〇〇〇人の中国人反乱者の装備と組織はひどく粗末であったため、彼らはオランダ側のマスケット銃による最初の一斉射撃で敗走した。結局、彼らは全員追跡されて殺された。その結果、双方のグループに恐怖と憎悪が生じ、オランダ人には、すべての中国側の軍事的な威嚇を解消することができると自分たちの力に対する過信が定着した。その後、経済的な困難がオランダ人と台湾の中国人指導者たちの絆を弱めた。多くの中国人の徴税請負人や許可を受けた村の商人たちが、彼らの許可を得るためのせり値をあげた。しかし、契約に規定されていた金額を儲けるのは不可能なことが分かった。そうすると、彼らはオランダ人から高利の金を借りるようになった。一六五八年、台湾における砂糖市場が下落したため、オランダ人は、彼らがその時まで中国人の生産者に支払っていた砂糖の固定価格を下げた。

だがより危険だったのは、時を同じくして高まりつつあった国姓爺とオランダ人の間の対立関係であった。中でも中国人は、自らの胡椒貿易の独占を確実にするため南東アジアにおける中国の海運事業に介入しようとするオランダ人の企てに、最も怒りを募らせていた。加えて他のすべ



ての商業分野においても、国姓爺とオランダ人との競争は激化していた。

一六五五年から一六五六年にかけて、国姓爺は台湾をほぼ中国貿易から切り離した。それは、表向きには彼の所有するジャンク船が、台湾あるいは別の場所ですらに扱われていることを理由としていた。しかし、おそらく、中国の品物を日本やベトナムなどで販売する際、オランダ人が自らの競争相手となる可能性を摘み取るためでもあっただろう。一六五六年、国姓爺は自分の支配下にあるすべての中国人に台湾を去るよう命令を下した。一部の者たちはこの命令に従ったが、もしオランダ人が止めなければ、もっと多くの者がこの命令に従ったことであろう。一六五七年、オランダ人は国姓爺に対して、毎年、銀と戦争用物資、そして胡椒貿易港の使用許可証を提供することを申し出た。そこで彼は台湾における貿易を再開したが、すぐに新たな事件について不満をもちやすくなった。オランダ人が、カンボジアやジョホール（Johore）から来た国姓爺のジャンク船から略奪を行っていたからである。一六五九年の南京での敗北の後、国姓爺が避難場所として台湾を征服するつもりではないかという噂がいつそう強くなった。台湾における中国人共同体に対する彼の影響力は、その頃までに非常に大きなものになっていたに違いない。一六五九年二

月には、オランダ人により国姓爺への使者として使われていた通訳の何斌（Ho Pin ホ・ピン）——オランダの史料ではピンクワ（Pinquá）と呼ばれる——が、彼の下へ亡命した。というのも、何斌が国姓爺のために台湾の中国人の間で税を徴収していたことがオランダ人に露見してしまったからである。

これらの不安定な状況の中、オランダの軍事面の支出はますます増大し、その一方で台湾における貿易利益は減少した。東インド会社は、要塞の建築物を改修したり、防衛用に船舶を艦装するための莫大な金額を支出する用意はなかった。他方、中国との貿易を続行する別の方法が見つかるまではこの島を去ることはできなかった。一六五二年および一六五三年、新しい王朝である清がオランダとの貿易を明よりも好意的に評価しているかどうかを調査するために、オランダの使節が広州に派遣された。北京の宮廷は、オランダ人が一六二〇年代に好戦的に振舞ってきたから、彼らを受け入れてはならないというイエズス会士とポルトガル人の圧力にそった回答しかしなかった。しかし、広州の官吏は、オランダ人が使節団を派遣するならば、何らかの取り決めがなされるかもしれないと代表に知らせた。一六五五年、それは実行された。使節団はピーテル・デ・ホイエル（Pieter de Goyer）とヤロプ・デ・ケイゼル（Jacob

ジョン・E・ウィルズJr. 著 一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人（蘭ゼミ）

de Keyser)の指揮下にあった。何名かのオランダ人が初めて中国内陸部をくまなく見ることができた。そのうちの一人は旅行記を書くことに身を捧げ、公式の宴会を詩の形で描写している。

ここには金と絹の衣装の海が波立ち

きらめく器はあらゆる香料を満たしたたえ

アポロはミューズとともに降臨す

ここは異教徒の地か？ 我々は天国にあり<sup>17)</sup>

初めてオランダの大使が禁裏に迎えられた。彼は皇帝の前に身を投げ出し、彼の上司（バタヴィア総督）が清国の「朝貢者」リストにあることを聞いた。東インド会社の職員は、東方の礼儀作法や傲慢さが利益の妨げとなっていない限り、これらを気にかけることは減多になかった。しかし、この時代、朝貢システムでは、海上貿易は使節団（の来訪）を条件に許可された。皇帝は、おそらく著名なイエズス会士ヨハン・アダム・シャル・フォン・ベル（Johan Adam Schall von Bell）によってそのように仕向けられたのであろうが、オランダの使節団の回数を八年に一度と限定したのである！それにもかかわらず、オランダ人は、一六五七年から一六五九年の間、広州地域において限られた範囲で貿易を進めることに成功した。しかし、それは台湾に取って代わるにははるかに足りなかった<sup>18)</sup>。

絶えず強くなっていた国姓爺の脅威と向き合わなければならなかった時に、バタヴィアの権力者たちが明るみに出した信じられないほど杜撰な仕事や相互の意見の相違は、これらの困難や不安定さによるものではなかった。彼らは、台湾長官（gouverneur op Taiwan）フレデリック・コイエット（Frederick Coyet）の警告を重大とみなすことを拒み、かつて台湾評議会（de Raad van Taiwan）においてコイエットの敵対者であり、当時インド評議会（de Raad van Indie）のメンバーであったニコラース・フェルブルフ（Nicolaes Verburch）に耳を傾けたのである<sup>19)</sup>。

一六六〇年について彼らが台湾の駐屯地に援軍を送った時、それはポルトガル人との戦争で名声を得たヨアン・ファン・デル・ラーン（Joan van der Laen）の指揮下に入ることになった。彼らは、もし、彼らが待ち望んでいたように国姓爺の脅威がなくなるならば、軍隊をマカオへの攻撃のために使うよう彼に命じた。ファン・デル・ラーンは台湾に到着するとすぐに、即座の脅威はないという考えにいたったが、コイエットは援軍の大部分をとめおくことに成功した。ファン・デル・ラーンは今やマカオへの攻撃に十分な軍隊を自由に動かせないので、バタヴィアに戻った。彼がそこで表明した不平は、フェルブルフの影響とあいまって、コイエットを罷免する決議をもたらした。なぜ

ならコイエットは愚かで臆病にも国姓爺の侵略の危険性を警告したからである。この決議は国姓爺の軍隊が台湾に上陸して一カ月以上経過した後、しかし、バタヴィアがその恐ろしい知らせを聞く前の、一六六一年六月一〇日に採決された。

国姓爺は二万五〇〇〇人の兵士からなる軍隊をもっていたが、その多くはきわめてよく武装され、非常に規律正しかった。はるかに数で勝る中国の軍隊へのオランダ人兵士の小集団による二度の絶望的な攻撃は、惨めな敗走劇という結果に終わった。オランダ人は、郭懷一傘下の農民のように、マスケット射撃で中国人を追い払うことができるだろうと考えていた。港の中の四隻のオランダ船が国姓爺のジャンク船と激しい戦いを始めたが、それは一隻の船の弾薬貯蔵庫が爆発し、残り三隻が公海へ敗走することで終わった。五月の終わり頃にはオランダ人はただ「ゼーランドディア城」だけを占領し、維持しているだけになった。夏には多少の援軍が来たが、これは中国の軍隊に何かをするためには十分ではなかった。任命されたコイエットの後任が来たが、状況を見ると二目散にバタヴィアに逃げ去った。国姓爺の軍隊は台湾の大部分の居住地で彼らの支配を強化し、何人かのオランダ人の教師、宣教師やその他の捕虜たちを殺し、彼らの妻を将校に分配した。一六六二年二月一

日、その城は降伏した。コイエットは、彼には他に残されたものはなかったとはいえ、この降伏の犠牲になった。

オランダ人は一六六四年から一六六八年まで再び基隆を占領した。これはある種喜劇的な最終章であり、そこではオランダ領台湾史で最も主要な課題が再び浮かび上がってきた。基隆は清朝との貿易、および鄭氏政権との海上戦争の前哨地として再び占領されたが、その二つの分野のどちらにおいても、何も実現されなかった。三〇〇人にもみえない守備隊は劣悪な気候と果てしなく続く人的抗争に悩まされていた。一六六六年五月におきた三〇〇〇人から六〇〇〇人もの鄭氏の軍隊による襲撃が、かろうじて彼らを結束させた。鄭氏の軍隊は、多分、あまりにも人数格差があるのに反撃されたことに驚き、また、長期の占領のために十分な装備もしていなかったであろうことから、一〇日後に撤退した。しかし、オランダ人の立場は、先住民との抗争、および鄭氏の手先が村に潜入したことによって次第に弱いものとなっていった。結局、オランダ人は一六六八年一〇月に撤退した。<sup>20)</sup>

#### 期待と誤解、一六六二―一六九〇年

清帝国の初期の支配階級は、その中から皇帝の一族、高級官僚の大部分、軍隊の指揮官、そして恐るべき騎馬隊を

輩出した中国の民族でない満州族、中国が急襲される以前に満州族へ投降した満州地区の中国人、そして、もつと後に明朝から離反した者たちから構成されていた。海上での経験はいくらも持っていたのは彼らのうちのほんの少数の者だけだった。彼らは、国姓爺の海からの脅威に対して、はじめは、次第に厳格な海上貿易の規制措置をとることによって、そして、最終的には中国の南部沿岸全域から退去させることによって対応した。彼らは、二隻の船が包囲された台湾から福建の港へ入港した一六六一年一月まで、沿岸部のすぐ近くにいたオランダ海軍と協力することの利点を考慮しなかったようである。その時点においては何も取り決められなかったが、一六六二年六月、オランダの艦隊が「国姓爺の血に飢えた怒りに対する報復のために」、また、国姓爺に対抗して清と同盟を結ぶために戻ってきた時、その考えは清の役人たちにとって全く受け入れられないものではなかった<sup>(2)</sup>。

東インド会社は一六六二年、一六六三年、一六六四年にバルターサル・ボルト〈Balthasar Port〉に率いられた艦隊を送った。彼らは、一六六三年十一月、福建の海岸沿いにあった鄭氏の駐屯地を襲撃し、清が鄭氏の軍隊を廈門、金門島から撃退することを助けた。しかし、一六六四年一二月には、清の艦隊が海洋から再び帰って来てしまっ

たため、台湾を協力して攻撃する計画が水泡に帰したことを知った。さまざまな原因からオランダ人と清は互いにとっても厄介な信頼できない盟友であると気付いた。オランダ人は鄭氏の軍隊と基地にできるだけ早く、できるだけ多くの損害を与えたいと考えていた。それに反して、清は一六六二年の国姓爺の死とそれに続く激しい後継者争いの果てに、鄭氏の軍隊の大半が平和的に降伏することを望んだ。しかし、これには時間がかかり、オランダ人はこのすべての過程が敵を打ち負かすチャンスのみすみす逃し、敵と臆病な交渉をするものだと考えた。それに対して清はオランダ人を「急ぎすぎ」とみなし、オランダ人が鄭氏の駐屯地を勝手に攻撃した時には協力する用意がなかった。

一六六三年十一月の履門や金門島周辺での大規模な交戦において、やっと協力することになった。鄭氏の艦隊に対するオランダの攻撃や、おそらくそれ以上に、オランダの艦船や大砲が引き起こした驚きが、激しく戦った清の勝利となるはずのものを全面的な殺戮劇に終わらせることとなった。協力のための合意においては、履門や金門島を占領した後にはオランダ人が貿易特権を得るということが取り決められていた。しかし、すぐにオランダ人は、清の官僚制では、物事は最初に見えたものよりもより複雑であるということを知った。はじめは一六六三―一六六四年の船舶

の積荷の販売についてのみ承認され、その後二年毎に貿易用輸送品の販売が承認された。最終的には一六六四年に、計画されたがついには失敗した台湾への遠征に彼らの参加を容易にするための特別な恩恵として、これらの認可なしに貿易を行うことが認められた。オランダ人は、中国人が特権を与えられた何人かの商人にだけオランダ人と貿易を行う承認を与えていることに対して絶えず不満を言い、彼らが官僚側の遅れや言い逃れに遭遇した時にはしばしば横柄になり、苛立った。一六六五年には、彼らは貿易使節団のみを派遣し、戦艦を全く派遣しなかった。しかし、この外面上穏やかな年は、中国・オランダの脆い友好関係の終わりを意味した。中国の伝統的な外国とのアプローチの仕方、とりわけ管理的で官僚的であった。中国人は、外国人との接触を細かく定義されたルートや規則によって制限することに努め、臣下が貿易の認可を求めたすべての君主に対し、決められた期間に使節を送ることを求めたのである。これらの規則は、清の官僚制度の新たな活性化や、彼らが海上貿易の全ての形態に厳密な管理を行うようになった結果、この時期に、さらに大幅に厳しくなった。デ・ホイエルやデ・ケイゼルが大使として受け入れられた時に、八年毎に大使を派遣してもよいという「特権」を与えられたが、それは一六六四年に再び使節が派遣されなけ

ればならないことを意味した。オランダ人が一六六四年と一六六五年に使節を伴わずに現れた時、彼らは中国の役人から、使節を送るまで、もはや貿易を行う許可は与えられないと告げられた。その上、オランダ人は二つのグループの船舶を、一つは、当時、主として彼らの港として使われていた福州へ、他の一つを厦門湾へ送ることによって中国人の感情を害した。厦門に停泊していた船と、後に福州へ来航した数隻の船は、貿易許可を得られなかった。しかし、極めて悪いことに、基隆から出航した一隻のオランダ船が、日本から航海して来た裕福な鄭氏の貿易用ジャンク船を追跡し、打ち負かそうとして、さらに北へ航行した。乗組員は、ノルマン人がいくつかのフランス修道院で行ったように、偉大な仏教の巡礼の島、普陀山 (Pu-to-shan) のいくつかの寺院を略奪した。

これら一連の事件と、北京の宮廷に送られたこのことに関する報告について聞いたとき、福州の官吏は非常に立腹した。しかしながら、彼らは即座に処置をとることはしなかった。一六六六年一月にオランダ人が福州を出発した時、彼らは使節団を伴わずして戻ってくることはできないと警告された。この年に起きた他のあらゆる問題にもかかわらず、また、皇帝への上奏文の中で、オランダ人は確実に戻ってきて再び厄介事を引き起こすであろうと高官が警告した

にもかかわらず、この時点ではオランダ人の貿易特権は取り消されず、宮廷がファン・ホールン指揮下のオランダ使節が到着したことを聞いた一六六六年末に取り消された。

北京における政治面の変化とオランダ人に関するあらゆる厄介事についての他の調査がこの結果をもたらしたものである。オランダ人は、極度に簡潔に、それ以上詳しい説明もないままこの取り消しを通告されたため、これを以前締結した契約に対する違反であると考えた。一方、清にとっては、これは宮廷が一方的に与えた許可をオランダ人の不行跡による当然の措置として撤回したに過ぎなかった。

こうしたことから、新たな許可を得るため、ピーテル・ファン・ホールン（Pieter van Hoorn）の指揮のもとにお金をかけた、印象深い、周到に準備された使節を派遣するという東インド会社の試みは初めから失敗する運命にあった。私たちにとって本当に重要なのは「六カ月を必要とし、何マイルも陸路と同じく水路を通過して三七の都市、三三五の村、三四の寺院を通り過ぎた」福州から北京への長く、魅力的な旅の詳細な報告にある。私たちはここで、オランダ人たちが全く迷わず同意することができた朝貢使節をめぐってお決まりの儀式の稀に見る明確な描写と、一七二二年まで統治した優れた若き康熙帝（K'ang-hsi）について外国人が書いた最初の記述の一つに出会う。彼らは皇帝を

一六才と考えたが、実際には彼はまだ一三才であり、既に権力を手に入れ始めていた。彼はオランダ人が贈った馬にとりわけ魅了され、それを見ては頻繁にほほえんだ。<sup>23</sup>

一六六七年の夏に使節団を迎えるために来た船は貿易を行う許可を得られなかった。一六六八年に広州へ派遣した二隻の船はごく少量の商品のみを売り、しかも、それは無許可であった。ここにおいて東インド会社はバタヴィアと中国との貿易を一六七六年までバタヴィアの自由市民（東インド）会社勤めていない自由な住民、バタヴィアの中国人、そしてマカオのポルトガル人に任せた。

中国での大きな問題によって、貿易を再開するには新しい障害が生じた。一六七三年から一六七五年の間に、征服戦争の間に清に仕えていた三人の重要な中国人の将軍が「三藩の乱」の際に満州の支配者に対して反乱を起こした。国姓爺の息子、鄭經（Cheng Ching）はすぐに福建で反乱者たちの味方をし、厦門および隣接した沿岸地方を奪還した。一六七五年、福建と広東の反乱者たちは書簡をバタヴィアに送り、その中で貿易船を派遣するようオランダ人にすすめ、鉛、硫黄、硝石といった戦争必需品の購入に非常に大きな関心があることを明らかにした。一六七六年、オランダ人は広州にも福州にも船を派遣した。広州で彼らは政治的な不安定さが貿易を阻害しているということ



を知り、一六八一年まで貿易を行うためのさらなる努力をしなかった。福州において彼らは反乱者たちの統治の崩壊と、清による再占領に驚かされたが、後に、彼らは清もまた軍事物資の調達と、鄭經に対するオランダ人の海上での支援に関心を抱いていることに気が付いた。一六七七年から一六八一年まで、ここから福州における商取引と政治的交渉が進み、一六七九〜一六八〇年には三人の清の下級役人が使節としてバタヴィアに送られさえした。しかし、オランダ人は、六〇年代と同じく清によって裏切られないよう、再び支援をしたいとは思わなかった。そのうえ、清の指導者たちはオランダの支援を求める要請に関して意見の統一もなければ首尾一貫もしていなかった。一六八〇年、彼らはオランダ人の助けなしで鄭氏の軍隊を厦門から追い出し、それによって海上での支援を貿易特権と交換するはずであった協定を結ぶ最後の機会はなくなつた。「三藩の乱」の最後の反乱者は一六八一年に殺された。一六八三年に清は台湾を征服した。

東インド会社は中国沿岸部における貿易を一六九〇年まで続けたが、その投資額も利益も年々少なくなつていった。彼らは一六八四年に海上貿易が法的に認可された中国人商人と、またイギリス東インド会社との急速に激化した競争にさらされるようになった。いくつかの分野では、マカオ

のポルトガル人でさえ貿易上の手強い競争相手であり続けた。イギリスの拡大は、その大部分を、マドラス〈Madras〉にいた会社の職員が個人貿易商として努力したことによつていた。これは、たびたび会社の職員に裏切られていた東インド会社とは対照的である。東インド会社は、新たな貿易の機会を見つけるため会社の職員に個人的な旅行を許可するということをほとんど、あるいは全くしなかった。一六八四年から一六八五年にかけて清との海上貿易が合法化されるとともに、新たな税と貿易規制が導入されたが、それらはオランダ人にとつてさらなる重荷であり、かつ怒りの原因となつた。フィンセント・パーツ〈Vincent Paets〉に率いられた第三次使節団は一六八五〜一六八七年に、貿易状況をよくすることに何れも成果を挙げることができなかった。

一六九〇年には、東インド会社はついに一隻の船も中国に派遣しなかった。というのも、フランスからの攻撃の可能性に備えてバタヴィアを防衛するため、できるだけ多くの船を使うことを望んでいたからである。通常の貿易は、一七二八〜一七二九年にやつと再開された。この時期、バタヴィアと中国との間の貿易は中国のジャンク船と、時にはマカオのポルトガル人によつて送られた船団によつて担われていた。

## バタヴィアの中国人

ジャワ、スマトラ（Sumatra）およびマレー半島の港においては、中国人はオランダ人にもポルトガル人にも先行していた。特にバンテンでは彼らは多大な影響力を持っていた。それは、彼らがその地域の海外貿易、胡椒生産とアラック酒の醸造所の大半を支配していたからである。オランダ人、中国人およびポルトガル人がバンテンの胡椒輸出の取り分をめぐって互いに競争するようになると、不信任や衝突が避けられなくなった。しかし、一六一九年のバタヴィア設立後、ヤン・ピーテルス（「ゾーン」・クーンは中国人が、彼の「若い共和国」にとって素晴らしい入植者であると同時に、競争相手でもあることに気付き始めた。オランダから送り出された「我が国の人間のくず」に比べると、中国人は誠実で、勤勉且つ有能な商人、職人あるいは農夫であるようにみえた。クーンは、会社の利益がそれを要求するような場合には、アジア人を奴隷にしたり、根絶やしにすることも躊躇わなかったが、「カピテン・ベンコン」の客として彼のもとで何夜も過ごし、何度もアドバイスを求めた。ベンコンは会社の参事会（het College van Schepenen der Compagnie）の一員であり、彼の後継者たちも同じく一六六六年までこの役職を担当した。彼は、一六四〇年に資産管理委員会（het College van Boedel-

meesteren）のメンバーに任命された二人の中国人のうちの一人だった。後の中国人カピテンたちは、異なる人数の補佐役の支援を受けたが、バタヴィアの中国人社会は単独の指導者のもとにあり、これは、台湾の一〇人からなる中国人共同体評議会（Raad van de Chinese gemeenschap）とは対照的であった。外国の諸港市において自国民に対して責任を持ち、その管理も行っていた単独指導者による組織は、アジアでは長きにわたって存続していた。それが単に東インド会社によって引き継がれ、いくらかの新しい法的規定を与えられたのである。中国人は、台湾におけると同様に、人頭税を払ったが、これは他の多くの税金と同じく中国人徴税人によって徴収された。四〇年代以降、中国人企業家と労働者はバタヴィア周辺地域での砂糖生産を急速に拡大した。一六五二年には、それは、オランダ領台湾の数年分に匹敵し、一七一〇年頃には生産量は一六五二年の五倍に達した。ジャワの経済的、政治的状況は、台湾のそれとは非常に異なっていたが、この二つの地域における中国・オランダ関係は、多くの点で驚くべき一致を示した。

一六四四年以降、ジャワにおける中国人移民は、中国沿岸で起こった戦争の影響で恐らく減少した。ヨアン・マールツアイケル（Joan Maetsuiker）の統治は、中国人に対して、彼の前任者と比べてあまり肯定的なものではなかった。

一六八四年に中国の外国貿易が法的に認められた後、中国人移民は再び増加し始めた。一六八九年頃、バタヴィアの住民は、押し込み強盗の数が増大したことについて苦情を言った。その際、彼らはこれを貿易用ジャンク船で到来し、然るべき生活手段を持たない多数の中国人が原因であるとした。一六九〇年、バタヴィア当局は、一六八三年以降に來航したすべての中国人はカピテンや中国人共同体のその他の権力者のもとに出頭しなければならないことや、権力者たちが彼らの信頼性を保障しない限りは長期滞在できないということを命じた。一六九〇年やそれ以降にジャンク船で來航したほとんど全ての中国人は、同じ年に再び出航することを勧告された。中国人移民を監督下に置くためになされたこれらの措置は、その後の多くの試みと同様に、全く成功しなかった。これは、部分的にはオランダ人官吏への賄賂が効いた結果であった。他方で、東インド会社は、中国人によって経営されていた製糖所の製品や、中国人ジャンク船での貿易も必要としており、製糖所向けの労働力の供給やジャンク船の船長との良好な関係を危険に陥らせようようなことを少しでも行うつもりはなかった。このため、インド評議會ははっきりしない方針をとり続けた。中国人を恐れながらも同時に必要としていたためである。中国商人が外国と結びつくことや政権を密かに破壊す

る活動の危険を恐れた清朝政権が一七一七年から一七二二年までジャンク船の海外渡航を禁止した後、バタヴィアの権力者たちは、安堵の溜息とともに貿易の再開を歓迎した。そして彼らは、以前よりもバタヴィアの中国人により多くの恩恵を与え、移民の制限に関する彼ら自身の措置を無視した。公式にはバタヴィアや郊外における中国人の人口は、一六八二年には約三〇〇〇人、一七一九年には四〇〇〇人に達した。しかし、その増加はもっと急速だった可能性がある。中国人製糖所の数が最も多くあったバタヴィア周辺の農村地帯における公式なデータでは、一七一九年には七五五〇人だったものが一七三九年には一万五七四人に増加したとの報告があり、この数もおそらく少なく見積もったものであろう。勿論、常にジャワ島の他地域、特に東岸に定住した多数の移民が存在した。農村地帯の多くの中国人は製糖所に働きに行ったが、現地では窃盗やその他の犯罪に関する苦情が次第に増加し、その大部分は社会的に不安定な中国人住民が原因であるとされた。一七二五年以降に生じたバタヴィア周辺地域における全般的な経済的衰退によって、中国人にとって生活はおそらくより困難になったであろう。一七二九年以降、どの中国人も二レイクスターデル(「五ギルダー」)を支払って「許可証」を購入する義務を負った。この規則は、会社の墮落した職員によって、

彼らが様々な方法で揺すり取るために利用された。都市においてはカピテンや多くの中国人とオランダ人との協調は良好であったが、農村地帯ではオランダ人はよりわずかな権力しか持っておらず、中国人も友好の度合いがきわめて低かった。派閥の形成、互いの争い、オランダ人長官による思慮に欠けた政策が、一六五〇年頃の台湾と、不安を抱かせるほど類似したイメージを完全なものにした。ここでの最大の相違は、介入することができるまで待っていた国姓爺（のような人物）が存在しなかったこと、そして、もしジャワ人の王侯が介入した場合には、彼らはこれをオランダ人、中国人双方にとって有利になるようにすることができたということである。

一七四〇年七月二五日、インド評議会は、許可証を持たないすべての中国人は治安官（schepenen）の尋問を受け、しかるべき生計の手段を持たない者はセイロンへ追放されなければならないという命令を下した。これは、アドリアーン・ファルケニール（Adriaan Valckenier）総督の派閥のライバルであるG・W・ファン・イムホフ男爵（G.W. baron Van Imhof）の勧告によって行われた。この措置により、許可証を持つと持たないにかかわらず、多くの中国人が、全く思いやりのない仕方では捕えられることになった。多くの者は森に逃げ込み、不法に滞在してい

る同胞と合流した。九月末頃には農村で多くの騒動が報告されたが、評議会は、ファン・イムホフの影響下にあつて、これをさほど深刻にはとらえなかった。同胞の多くと疎遠であつた中国人カピテンは、状況の深刻さを十分に認識していなかったであろう。時には数千人からなっていた大きな中国人グループが一〇月八日の夜から九日にかけて市壁を襲撃したが、その直前の数日の間に、やっといくつかの防衛的な措置が取られた。これらの襲撃は、その後一〇月一日まで時折起こつた襲撃と同じように、中国人がうまく組織されておらず、火器の取り扱いに全く経験がなかったことが主な理由で、撃退された。バタヴィアの中国人の家でいくつかの武器が発見され、群衆は反乱に全く関係がなかった中国人を殺し、彼らの家を略奪し、焼き払い始めた。市中における襲撃とその後に続いた殺戮でおそらく約一万人の中国人が死亡したであろう。オランダ軍は農村での進軍にほとんど抵抗を受けなかった。よりよく武装し、組織化され、何人かのジャワの王侯の支援を受けた他の中国人の武装戦力は北東ジャワでいくらか勝利をあげたが、結局のところ、オランダ人と結託した他のジャワ人によって打ち負かされた。この「中国人反乱」は、バタヴィアでの戦闘を除いて、ほとんどが長期にわたるジャワ人対オランダ人の闘争の一部であつて、後にすべての関係者がそこ

で中国人を犠牲としたのである。ファン・イムホフはバタヴィアでのあやまちと殺戮の責任をファルケニールに負わせようとしたが、約八〇年前に、台湾を失った全責任をコイエットに負わせたバタヴィアの権力者たちほどには成功しなかった。ファルケニールは、延々と続いた告発と反論の間、一七五一年に死亡するまでバタヴィアで投獄された。バタヴィアの経済生活は中国人社会の破壊によって多大な損害を受けた。しかし、中国でのジャンク船貿易は再び速やかに回復した。同じようにバタヴィア周辺地域での砂糖生産も再び戻ってきたが、一七四〇年以前の水準以下にとどまっていたと思われる。ジャワにおけるオランダのシステムの中のきわめて多くの分野で、中国人は彼らの重要な任務を再開し、それを次第に拡大していった。

### カントンシステム (Kanton-system) の中のオランダ人

一八世紀の六〇年代において、ヨーロッパへの中国の茶の輸出は一七二〇年頃の一〇倍に増加し、一八三〇年頃には一七六〇年の三倍になった。一八世紀に初めてヨーロッパ人はほかの大陸の生産物、すなわちインドの綿、モカ (Mocha) とジャワのコーヒー、中国の茶、そして西インドの砂糖の、非常に大規模な買い手となった。広州のすべてのヨーロッパ商人は中国人によって同じように厳しく監

視され、ヨーロッパの一つの国が特権を与えられるということはあり得なかった。ヨーロッパでは茶に対する多国籍市場があり、一〇〇パーセントの輸入関税を避けるためのイギリスへの茶の密輸は繁栄する国際的な商売であり、その中心の一つがゼーラント (Zeeland) であった。従って、広州におけるオランダ人の貿易は多くの点でイギリス人、フランス人、そしてデンマーク人などのそれに類似しており、そのため、この国際的な現象の一部としても研究されるべきである。

一七二〇年頃には、中国のジャンク船は、すべてのヨーロッパの船が広州から輸出した合計量と同じくらいの量の茶をバタヴィアに運んだと思われる。この茶の一部は会社によってバタヴィアで買われ、母国に船で送られた。しかし、より多くの量が個人によって会社の船で非合法にオランダに送られた。これによって、ヨーロッパ人が彼らの輸入品をヨーロッパ向けに輸出する際の特徴であり、さらに、「大いなる」広州への通行税の特徴であったところの注意深い品質管理、異なる種分類、密閉した梱包は不可能となった。従って、オランダの茶はヨーロッパの市場ではあまりよい成果をあげなかった。バタヴィア当局は中国に船を送る用意はなかった。彼らはバタヴィアのジャンク船貿易を弱めたくなかった。というのも、それが中国への胡椒

の輸入を含む中国との貿易関係を作っていたからである。新しく設立されたオーストエンデ会社（Oostendse Compagnie）もまた刺激となっており、このため、一七二八年以降広州への航海は再びオランダから直接行われた。この方法で、会社はよりよい品質の茶を入手し、それをより早くヨーロッパ市場にもたらし、そして、おそらく、バタヴィア当局とのトラブルや妨害を回避したいと望んだ。しかし、六年もたないうちに直接貿易のシステムは止められ、一六九〇年以前に使われたバタヴィアから中国へのオランダの航海システムが再開された。十七人会はこの方法でヨーロッパからの長い航海の際の熟練商人の高い給料による大きな支出を節約し、胡椒や他の熱帯の産物を販売することによってカントン貿易（Kanton-handel）に投資された銀貨の総額を減らすことを望んだ。バタヴィア当局はこの時期には前の数年と比べて、これらの航海を行うことにより積極的だった。しかし、この方向転換の理由は全くはつきりしない。

広州での貿易におけるオランダ船の積載量の増加と、直接にバタヴィアと中国を航海した時代（一七三四～一七五四年）のオランダによる茶の輸出の増加は、イギリスやフランスの競争相手のそれよりも、また、全ヨーロッパ合計量の増大よりも、さらに急速に起こった。<sup>27</sup>しかし、

ヨーロッパの市場でオランダの輸入製品はより粗悪である  
とみなされ、広州オランダ商館の財政報告の詳しい調査では  
いくつかの非常に注目すべき実態が明らかになった。胡椒は  
広州ではバタヴィアでジャンク船へ販売されるほどの利益を  
あげておらず、オランダ人は中国商人に前払いし、その取引を  
早く進めさせるためにますます多くの銀を費やさなければなら  
なかった。バタヴィアの墮落した雰囲気の中にいる人々の改  
善は全く期待できず――そのことについて十七人会の書簡は苦  
々しく語っているのだが――一七五六年にオランダから広州へ  
の直接の航海が再開された。七年戦争の間、中国でのオランダ  
の航海は、他の中立国のそれと同じように一定しなかった。一  
七六三年から一七七七年までの平和的な拡大をみた新たな時代  
にはオランダの貿易は再び発展を始めたが、戦前の水準と比較  
すると、フランス人やイギリス人の貿易ほど急速ではなかった。  
アメリカ独立戦争のため中断した後、貿易は一七七〇～一七七  
七年の水準を少し下回っていたが、他方、イギリス人の貿易は  
非常に急速に増大した。東インド会社の最終的な解散とフ  
ランスの戦争がオランダの対中国貿易にとつてとどめの一撃と  
なったが、イギリス人は一七八五～一七九一年と一八二八～一  
八三三年に茶の輸出を倍増した。

前述の大部分と一七五六年以降のほとんどすべてのデー



タは非オランダ語の文献に基づいている。すなわち、広州オランダ商館の原本の日記はハーグの国立公文書館(Algemeen Rijksarchief)に保存されているが、減多に参照されない。それゆえ、私たちはオランダの貿易とオランダ商館の内部の事柄についてほとんど知らない。しかし、私たちはその周辺、取り巻く人々、彼らが従った中国システムについて非常に多くを知っている。

一七世紀に中国・オランダ関係の妨げとなり、一九世紀にはさらに中国・ヨーロッパ関係の妨げとなるであろう両者の衝突は、このシステムによって弱められた。貿易の目覚ましい発達によって、両者にとっては商業および財政面の利益が主要な関心となり、また、中国とヨーロッパ政府の間には、両者を引き離し、交渉や課税に関して商人たちに一任していた制度が緩衝装置として存在したからである。

一八世紀初め以来、広州との貿易において、オランダ人とその競争者たちは、保証人(Adon)、すなわち、治安員と仕事をするよう強いられた。治安員は、彼らの善行や船にかけられた税金の支払いに関して責任を有する役人だった。この商人は、行(hongs)と呼ばれる重要な会社の限られた代表グループに所属しており、それはヨーロッパ人に対する茶や陶磁器の独占的販売権を持っていた。このシステムがもたらす様々な苛立ちにもかかわらず、オランダ

人およびヨーロッパ人の競争者たちが貿易を行った唯一の場所は広州であった。イギリス人は広州での制限的措置に我慢ができず、時折、さらに北方の厦門か寧波(Ningpo)で貿易しようとした。ある特定の外国人グループとの貿易を一つの港に限定する傾向が常にあった清当局は、一七五〇―一七五七年に、ヨーロッパ人には広州においてのみ貿易することを許可する旨を最終的に決定した。同時に、治安員システム(veiligheidsgentensysteem)がより拡大化、厳格化され、新しい法令が公布された。イギリスがこの問題および他の様々な困難について宮廷に抗議するため、通訳のジェームス・フリント(James Flint)を北京に最も近い港に派遣したところ、清当局は彼を広州で三年間の自宅監禁とし、広州での貿易についてはさらに厳しい措置を公布した。一七五五年と一七六〇年の規則によって、公行商人たちはさらに全面的に貿易を支配することになったが、同時に、彼らは保証人になったり、倉庫や住宅を賃貸していた外国人に対し、より大きな責任を負うようになった。一七六〇年、彼らは共同の資本をもって、外国人とのあらゆる貿易を管理する団体である一つの公行(Co-hong)に統合された。しかし、ヨーロッパ人が一人の有力な公行商人に、賄賂として分配させるため大金を与えた後、一七七一年にこの組織は解散した。公行商人たちは、

今や外国人から金を借りることを禁じられた。しかし、それにもかかわらず、なお彼らはそれをし続け、多額の負債と公行会社の倒産は七〇年代にいつそう多く、より深刻な諸問題を引き起こした。

ヨーロッパ人は城壁で囲まれた都市、広州の町中に入ることは禁じられており、彼らの居住地および倉庫の敷地から他所へ行く機会はかなり厳しく制限されていた。川の数マイル下流の黄埔（Whampoa）に停泊していた船と水夫たちは厳しく監視された。ヨーロッパ人は貿易のシーズン中だけ広州地域にとどまることを許され、冬にはマカオで過ごさなければならなかった。しかし、この「貿易版ラザロの館」（*Handelsazarushuis*）での生活もまたよい側面を持っていた。公行商人との結びつきは時には固く、友好的であった。外国人たちはアンシャン・レージュムの個性の素晴らしい集まりを形成していた。ある者たちは愚かであり、他の者たちは非常に風変わりで、また他のある者たちはきわめて聡明で博学であった。食べ物も飲み物も制限を受けることはなく、素晴らしい磁器のコレクションで食事をし、その後に階段からすべてを投げつけても誰も気にしなかった。黄埔にいる各船は、見事な楽団を持ち、毎日、日の出、日の入りの際に演奏した。その時に水上の至る所から聞こえてくる音楽は素晴らしい効果をもたらし<sup>28</sup>た。

### 最後の使節団

私たちは歴史のまだ浅い東インド会社が、明時代の宦官派と反宦官派の政争の進展に巻き込まれた時に私たちの物語を始めた。私たちは、フィラデルフィア近郊の別荘にいるアン・ドレアス・エヴァラルドウス・ファン・ブラーム・フックヘー・スト（*Andreas Everardus van Braam Houckgeest*）とともにこれを終える。彼はオランダ使節団が、中国の最後の偉大な皇帝に対して敬意を表したることについての報告をジョージ・ワシントン（*George Washington*）に献呈した。この時、皇帝は六〇年続いた彼の統治の最後の時、腐敗と蜂起が清の体制を揺るがせ始めた時期にあつて、それは、まさに東インド会社の存在の終焉の時であった<sup>29</sup>。

イギリスはマカートニー卿（*Lord Macartney*）率いる印象深い使節団を派遣し、それは一七九三年に北京へ到着した。しかし、使節団は広州に関するイギリスの苦情に対処してもらうことはできなかった。だが、広州の清当局は、使節団が北京にもたらした彼らに対する苦情について憂慮していたようである。そのため、当局は苦情のより少ない、より友好的な使節団を派遣してくれるその他の外国人グループを見つけることを望んだようである。中国で東インド会社のために八年間過ごし、その後アメリカに移住し、次いで広州の居留地の長として再び東インド会社に帰って

来た落ち着きのない野心家のファン・ブラームは、彼らの企てのためには申し分のない標的であった。彼らは彼に、ポルトガル人とイギリス人は皇帝の在位六〇年記念式典に祝賀の使節団を送る予定であると伝え、オランダ人もよもやこの重要な出来事の部外者でいたいとは思わないだろうと述べた。ファン・ブラームはこのことを即座にバタヴィアに報告して使節団を派遣することを執拗に迫り、その際、バタヴィアが特別な使節を派遣しようと思っていないなら彼自身が行くことを提案した。当時、東インド会社は、財政的、組織的に力を失いつつあったにもかかわらず、総弁務官（*de commissaris-en-general*）は彼の言い分は非常に説得力があると考えた。彼らは、卓越した博学な日本の前商館長、そしてベンガル（*Bengalen*）の前知事であったイサーク・ティツィング（*Isaac Titsingh*）を使節として派遣した。ファン・ブラームは副使として彼を支援しなければならなかった。

一七九四年九月に広州に到着した後、ティツィングは、ファン・ブラームの強引な推奨は主として彼自身の野心と騙されやすさによってなされたことに気が付いた。他のヨーロッパの国はどこも使節団を送っておらず、また、送るだろうという可能性もきわめて少なかった。さらに、広州当局はティツィングに、北京では要請を行ったり、苦情

を述べることなく皇帝に祝意を表するだけにとどめるようにと無理やり約束させ、使節団が彼ら自身のためになるように、また、全くオランダ人の利益にはならないよう仕向けた。ティツィングは、約束しなければ使節団が全く行けなくなると恐れて、それを約束した。

皇帝在位六〇周年を祝う大規模な祝典が、中国の新年、つまり一七九五年一月二日前後に開催されることになった。もしオランダの使節がこの重要な催しに参加すれば、広州当局の評判を一層高めることになると思われた。ティツィングは広州総督（*de gouverneur-generaal van Kanton*）に、皇帝が自分の出席を求めるなら、これに協力するであろうと述べた。彼は、あまりに遠い移動距離のため、これは不可能であろうと考えていた。しかし、皇帝がそれに同意したので、使節団は、寒く悲惨で、かつ骨の折れる四九日間の北京への旅に送り出された（馬による効率的な駅制でこのルートを踏破した使者は約三二日間しかかった）。到着後、使節団は、宮廷役人が彼らの受け入れの用意をほとんどしておらず、そのうえ、新年の準備であまりにも忙しかったため出迎えてもらえないという扱いを受けることとなった。だが、これらの困難を除けば、使節団は皇帝から多くの敬意を以て遇された。といってもその中には、皇帝の食事の食べ残しを供されるなど、彼らにとって

は馬鹿げた待遇もあった。彼らは様々な機会に、例えば、宮廷内での演劇上演といった場所において皇帝に会った。彼らには、壮麗な北海(Beihai)や、宮廷の西に位置する庭園を訪れる特権が与えられた。彼らは、北京郊外にある夏の離宮に二度も案内された。この宮殿については、ファン・ブラームが熱狂的な称賛をもって描写している。ある時、彼らは輝かしく派手な建築照明をともなう豪華な宴に行きあったが、それが、彼らが皇帝を見た最後の機会となった。皇帝の前で慣習である平伏礼を行うことを拒否したマカートニー卿とは対照的に、オランダ人は命じられたことによく従ったが、マカートニーよりも多くの目的を達成したわけではなかった。その後、ヨーロッパ人が朝貢使節として北京に受け入れられることは一切なくなった。一八五八年以降になると、大砲あるいはその脅しとともにヨーロッパやアメリカの外交官が訪れ、清は国際関係に関するヨーロッパ側の意見を受け入れざるを得なくなった。そのため、イギリス人、フランス人、アメリカ人、ロシア人はそれ以前のオランダと中国との関係についての報告から多くを学ぶことも可能であったが、それについてあまり関心を示さなかった。インドネシアに専心していたオランダ人も、同様であった。

# 注

(1) オランダ・中国関係におけるこれらの側面のいくつかにについて、さらなる説明は John E. Wills, jr., *Pepper, Guns and Parleys: The Dutch East India Company and China, 1662-1681* [胡椒と銃と交渉―オランダ東インド会社と中国 一六六二―一六八一年], Harvard East Asian Series No.75 (Cambridge Mass. 1974) 特に第五章を参照されたい。中国語の史料に興味を持つ読者は、この本の注および参考文献を参照のこと。

(2) J. W. IJzerman, ed. *Dirck Gerritsz Pomp, alias Dirck Gerritsz China. De Eerste Nederlander die China en Japan Bezocht (1544-1604)* [ディルク・ベリッツ・ポン・ポン別名ディルク・ヘリッツ・ポン・シナー中国と日本を訪れた最初のオランダ人(一五四四―一六〇四年)], *Werken Linschoten Vereniging* [リンズホーテン叢書] 9(Den Haag 1915), pp. 20-21.

(3) H. Kern en H. Terpstra, ed. *Itinerario, Voyage ofte Schipvaart van Jan Huygen van Linschoten Naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592* [リンズホーテン著 岩生成一ほか訳注『東方案内記』(大航海時代叢書第八、岩波書店 一九六七年)], *Werken van Linschoten Vereniging*, 57, 58, 60 (Den Haag 1955, 1956, 1957), vol. I, pp. 99-100.

(4) 一六〇一―一六二四年についての最も重要な史料は、W. P. Groeneveldt, *De Nederlanders in China, Eerste Deel: De Eerste Bemoetingen om den Handel in China en de Vestiging in De Pescadores 1601-1624* [中国におけるオ

ランダ人、第一巻―中国における貿易と澎湖諸島の商館についての最初の関係 一六〇一―一六二四年」(Den Haag 1898)で刊行されている。

- (5) C. R. Boxer, *Fidalgos in the Far East, 1550-1770* [極東のフイダルゴ 一五五〇―一七七〇年] (Oxford 1968), Chapter 5.

- (6) Groeneveldt, op. cit., pp. 135-137. また Leonard Blussé, 'The Dutch Occupation of the Pescadores (1622-1624)' [オランダ人による澎湖諸島の占領 一六二二―一六二四年], *Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan* [『国際東方学者会議紀要』], No. 18, 1973, pp. 28-44 を参照。

- (7) G. J. Hoogewerf, ed. *Journalen van de Gedenkwaardige Reizen van Willem Isbrantsz. Bontekoe, 1618-1625* [『ウィレム・イースブラント・ボントコーによる重要な航海の日誌 一六一八―一六二五年』], Werken Linschoten Vereniging, 54 (Den Haag 1952), p. 81, 85.

- (8) W. Ph. Coolhaas, 'Een Indisch Verslag uit 1631, van de hand van Antonio van Diemen' [アントニオ・ファン・ディーマンによる一六三一年のインド報告], *Bijdragen en Mededelingen van het Historisch Genootschap te Utrecht* [ユトレヒト歴史協会寄稿および報告], vol. 65 (1947), pp. 16-17, 74-92; Coolhaas, 'Een lastig Heerschapp tegenover een lastig Volk' [厄介な民衆に対する厄介な統治], *Bijdragen ... Utrecht*, vol. 69 (1955), pp. 17-44; François Valentijn, *Oud en Nieuw Oost-Indien* [『新田東へん地誌』] (Dordrecht en Amsterdam 1724-1726), Book 4, Chapter

- I, pp. 51-63; H. T. Colenbrander en W. Ph. Coolhaas, ed., *Jan Pietersz. Coen, Bescheiden Omtrent zijn Bedrijf in Indië* [『ヘーレン書簡集』] (Den Haag 1919-1953), vol. V, pp. 284-286, vol. VII, Part 2, pp. 1233-1255, 1689-1758; W. Ph. Coolhaas, ed., *Generale Missiven van Gouverneurs-Generaal en Raden Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie* [『一般政務報告書』], Rijks Geschiedkundige Publicatien [王国歴史史料大叢書], Grote Serie, No. 104, 112, 125, 134 (Den Haag 1960-1971), No. 1, pp. 187-190, 229-232, 252-256, 271-273, 414; C. R. Boxer, *The Christian Century in Japan* [『キリシタン世紀』], 関本栄一編注『ボクサー 宣教師の見た日本』(開文社出版、一九八六年) (Berkeley en Los Angeles 1951), pp. 369-373.

- (9) 鄭芝龍について C. R. Boxer, 'The rise and fall of Nicholas Iquan' [ニコラス・イクアの興亡], *T'ien-hsia Monthly* [『天土』], vol. XI, No. 5 (april-mei 1939) pp. 401-439; Iwano Seichi, 'Li Tan, Chief of the Chinese residents at Hirado, Japan in the last Days of the Ming Dynasty' [『明末日本僑寓支那人甲必丹李旦考』], *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* [『東洋学報』], vol. XVII (1958), pp. 27-83; Arthur W. Hummel, ed., *Eminent Chinese of the Ch'ing period* [清代における著名な中国人] (Washington 1943), vol. I, pp. 110-111 を参照。論考の残りの部分は「台湾および中国史」会議 (Asiomatic California 1972) のために執筆された未公開の John E. Wills, jr., 'The Dutch Period in Taiwan History: A Preliminary Survey' [台湾史におけるオランダ統治時代―予備的研



ジョン・E・ウィルズ Jr. 著 一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人 (蘭ゼン)

- 究」に論拠が置かれる。この論文は、散在する中国語やスペイン語、ポルトガル語等の史料や、刊行されたオランダ語史料、特に Colenbrander en Coolhaas, J. P. Coen; Coolhaas, *Generale Missiven; Dagh-Register gehouden in 't Casteel Batavia* [村上直次郎訳注、中村孝志校注『バタヴィア城日誌』(東洋文庫、平凡社、一九七〇～一九七五年)] (Batavia 1887-1931); J. E. Heeres en F. W. Stapel, ed. *Corpus Diplomaticum Neerlandico-Indicum* [オランダ東インド外交文書集] (Den Haag 1907-1955); N. Macleod, *De Oost-Indische Compagnie als Zee-Mogenheid in Azië* [アジアにおける海洋国家としての東インド会社] (Rijswijk 1927) に論拠が置かれる。
- (10) William Campbell, *Missionary Success in Formosa* [フォルモサにおける伝道の成功] (London 1889), vol. I, pp. 15-214; Campbell, *Formosa under the Dutch* [オランダ統治下のフォルモサ] (London 1903), pp. 87-379; J. A. Grothe, *Archief voor de Geschiedenis der Oude Hollandische Zending* [旧オランダ宣教史料集] (Utrecht 1884-1891), vol. 3 and 4; W. A. Ginsel, *De Gereformeerde Kerk op Formosa* [フォルモサにおけるオランダ改革派教会] (Leiden 1931).
- (11) Coolhaas, *Generale Missiven*, vol. I, p. 520.
- (12) Edwin J. van Kley, 'News from China: Seventeenth-Century European notices of the Manchou Conquest' [中国からの情報—満州族の占領に関する一七世紀ヨーロッパ人の認識], *Journal of Modern History* [近代史雑誌], vol. 45, No. 4 (december 1973), pp. 561-582.
- (13) Wills, *Pepper*, pp. 15-17.
- (14) これについて興味をひく例は、O. Dapper, *Gedenkwaardig Bedryf der Nederlandsche Oost-Indische Maetschappye op de Kuste en in het Keizerryk van Taising of Sina* [大清のべはナ沿岸と帝国内におけるオランダ東インド会社の重要な活動] (Amsterdam 1670), pp. 42-51 などを。
- (15) Coolhaas, *Generale Missiven*, vol. II, pp. 42-51.
- (16) Coolhaas, *Generale Missiven*, vol. II, pp. 609-612; Dapper, pp. 38-41.
- (17) Johan Nieuhof, *Het Gezantschap der Neerlandische Oost-Indische Compagnie aan den Grooten Tartarischen Cham, Den Tegenwoordigen Keizer van China* [偉大なタタール人のクーンヌナワ、現在の中国皇帝に対するオランダ東インド会社使節団] (Amsterdam 1665).
- (18) Wills, *Pepper*, Chapter. 1, note 48.
- (19) C. R. Boxer, 'The Siege of Fort Zeelandia and the Capture of Formosa from the Dutch' [ゴーリンジニア城包囲とオランダ人からのフォルモサ奪取], *Transactions of the Japan Society of London* [ロンドン日本協会紀要], vol. 24 (1927), pp. 15-48; 'Vervueterloose Formosa' [閑却されたフォルモサ] (フーンスほか著、生田滋訳『オランダ東インド会社と東南アジア』、大航海時代叢書、第二期一一) (Amsterdam 1675); *Dagh-Register*, 1661, 特に pp. 484-520.
- (20) 私は、このエピソードを別の論文の中で詳細に論じた。最も重要な史料は、オランダ国立公文書館 (Algemeen Rijksarchief [現: VOC Nationaal Archief]) にある Ko-



loniaal Archief [植民省文書], 1148 [現: 東 1100bis]: 982-1047, 1291-1362 ㉮ 1155 [現: VOC 1264]: f172-191 ㉮ もゑ。また *Dagh-Register*, 1668, pp. 117-118, 211-212 ㉮ 参照。

- (12) ㉮の部分な。Wills, *Pepper*, Chapter. 2-4 を論拠 ㉮ ㉮。㉮れこゝに㉮より簡潔な報告をな。John E. Wills jr., 'Ch'ing Relations with the Dutch, 1662-1690' [清とオランダとの関係 一六六二〜一六九〇年, John. K. Fairbank, ed. *The Chinese World Order* [中国人の世界秩序], Harvard East Asian Series, No. 32 (Cambridge Mass. 1968), pp. 225-256, 368-380 があゑ。一六六二〜一六六七年に㉮つゝ最も重要な史料の多くは Dapper の著作にあゑ。

- (22) Dapper, p. 347.  
(23) Dapper, p. 349.

- (24) J. Vissboose, *Den Hollandsch Gezantschap naar China in de Zeevarende Eeuw, 1685-1687* [一七世紀中国へのオランダ使節団 一六八五〜一六八七年], Sinica Leidensia, vol. 5 (Leiden 1946).

- (25) ㉮の部分は, Johannes T. Vermeulen, *De Chinezen te Batavia en de Troebelen van 1740* [バタヴィアの中国人と一七四〇年の騒乱] (Leiden 1938) ㉮。B. Hoetink による *Bijsdragen tot de Taal-, Land-, Volkenkunde van Nederland Indië* [オランダ領東インド言語学・地学・民族学紀要], vol. 73 (1917), pp. 344-415; vol. 74 (1918), pp. 447-518; vol. 78 (1922), pp. 1-136; vol. 79 (1923), pp. 1-44 所収の四本の論文を論拠 ㉮ ㉮。砂糖生産と茶貿易に関つては K. Giamann, *Dutch-Asiatic Trade, 1620-1740* [オ

ランダ・アジア貿易 一六二〇〜一七四〇年] (Den Haag and Kopenhagen 1958) ㉮ 参照。

- (29) ㉮州での貿易に関する最も優れた研究は, Louis Dermigny, *La Chine et l'Occident: Le Commerce à Canton au XVIII<sup>e</sup> Siècle* [中国と東洋 一八世紀㉮州における商業] (Paris 1964) ㉮ H. B. Morse, *Chronicles of the East India Company Trading to China* [東インド会社の中国貿易編年誌] (Oxford 1926-1929) ㉮ あゑ。オランダ語史料を利用した最も優れた研究は, J. de Hullu, 'Over den Chineschen Handel der Oost-Indische Compagnie in de Eerste Dertig Jaar van de 18<sup>e</sup> eeuw' [一八世紀の初期三〇年間にわたる東インド会社の中国貿易に㉮つゝ], *Bijsdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederland Indië*, vol. 73 (1917), pp. 32-151 ㉮ J. de Hullu, 'De Instelling van de Commissie voor den Handel der Oost-Indische Compagnie op China in 1756' [一七五六年中国にわたる東インド会社貿易委員会の設立], *Bijsdragen* vol. 79 (1923), pp. 523-545, *Memorieboek van pakhuismeesteren van de thee te Amsterdam van 1818-1918* [一八一八〜一九一八年におけるアムステルダム茶倉庫係報告書] (Amsterdam 1918) ㉮ もゑ。

- (32) Dermigny, vol. 2, pp. 521-532.  
(32) Peter Quennell ed. *The Prodigious Rake: Memoirs of William Hickey* [放蕩者ウィリアム・ヒッキー伝] (New York 1962), p. 133.  
(32) 卓越した著作であゑ J. J. L. Duyvendak, 'The Last Dutch Embassy to the Chinese Court (1794-1795)' [中国

ジョン・E・ウィルズ jr. 著 一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人(蘭ゼン)

宮廷への最後のオランダ使節(一七九四〜一七九五年)および中国語補遺『*Young Pao* 『通報』』, vol.34 (1938), pp.1-137 および 223-227 と vol.35 (1940), pp. 329-353 を参照。

## 参考文献

本章の注で明らかなように、オランダと中国との接触に関する参考文献は、広範囲に散在している。オランダ統治下の台湾について十分な研究がないことは、非常に残念である。別の主題に関しては、「以下のものが」特に勧められる。

W. P. Groeneveldt, *De Nederlanders in China, Eerste Deel: De Eerste Bemoeningen om den Handel in China en de Vestiging in De Pescadores 1601-1624* (Den Haag 1898).

John E. Wills, jr., *Pepper Guns and Parleys: The Dutch East India Company and China, 1662-1681*, Harvard East Asian Series No.75 (Cambridge, Mass. 1974).

J. Vixsboxse, *Een Hollandsch Gezantschap naar China in de Zeevarende Eeuw, 1685-1687*, Sinica Leidensa, vol.5 (Leiden 1946).

B. Hoetink に よる *Bijdragen tot de Tracé, Land-, Volkenkunde van Nederlandsch Indië* に所収された次の四本の論文。So Bing Kong, 'Het eerste hoofd der Chinezen te Batavia (1619-1636) [蘇鳴崗ーバタヴィアにおける最初の中国人長(一六一九〜一六三六年)]', vol.73 (1917), pp. 344-415; Ni Hoekong, 'Kapitein der Chinezen te Batavia in 1740' [連福光ー一七四〇年バタヴィアの中国人カピテン] vol.74 (1918) pp. 447-518; 'Chineesche officieren te Batavia onder de

*Compagnie* [オランダ東インド会社統治下のバタヴィアにおける中国人官吏] vol.78 (1922) pp. 1-136; So Bing Kong, 'Het eerste hoofd der Chinezen te Batavia (Eene nalazing) [蘇鳴崗ーバタヴィアにおける最初の中国人長(拾遺集)]' pp. 1-44.

Johannes T. Vermeulen, *De Chinezen te Batavia en de Troebelen van 1740* [バタヴィアの中国人と一七四〇年の騒乱] (Leiden 1938).

J. J. L. Duyvendak, 'The Last Dutch Embassy to the Chinese Court (1794-1795) 及び中国語補遺『*Young Pao* 『通報』』, vol.34 (1938), pp. 1-137 及び 223-227, vol.35 (1940), pp. 329-353.

中国・オランダ関係と中国に関するオランダ人の見解の非常に生き生きとしたイメージは、同時代の二つの記事に見られる。

Johan Nieuhof, *Het Gezantschap der Neerlandische Oost-Indische Compagnie aan den Grooten Tartarischen Cham, Den Tegenwoordigen Keizer van China* (Amsterdam 1665).

O. Dapper, *Gedenkwaardig Bedryf der Nederlandsche Oost-Indische Maetschappye op de Kuste en in het Keizerryk van Taising of Sina* (Amsterdam 1670).

この時代の中国史と外国との関係についてのより完全な概説は、次を参照。

John. K. Fairbank and Edwin O. Reischauer, *East Asia: The Great Tradition* [東アシアー偉大な伝統] (Boston 1960), Chapter 8 及び 9.

John. K. Fairbank, Edwin O. Reischauer and Albert M.

Craig, *East Asia: The Modern Transformation* [東アジア—近代における変化] (Boston 1965), Chapter 1.  
John. K. Fairbank, ed. *The Chinese World Order*, Harvard East Asian Series, No.32 (Cambridge, Mass. 1968).

## 訳注

- (i) 当時の教育機関としては、国費で運営された「国子監」、府州県におかれた「府州県学」、地方郷村の子弟を教育するために設立された「社学」があった。
- (ii) 日本では一般的に東南アジアと呼びならわしているが、原文が *Zuidoostatische havens* につき、直訳した。
- (iii) VOC は正式には「連合東インド会社」であるが、ここでは一般に定着している「東インド会社」の呼称に統一する。
- (iv) ペスカドレス諸島。Pescador はポルトガル語で漁民を意味する。ペスカドレスはその複数形であり、現在の澎湖諸島に相当する。訳文中においても、現在一般に用いられている「澎湖諸島」という呼称に統一する。
- (v) カントン。現在の広東省広州市のオランダ語読みである。訳文中においては「広州」に統一する。
- (vi) 正確には東南アジア方面への日本人の渡航が禁止されたのみであり、すべての日本の海上貿易が禁止されたわけではない。
- (vii) 「鄭芝龍とその子孫は、八〇年代の初めまで台湾海峡におけるオランダ人の最も重要な貿易相手であり、後に最も重要な敵対勢力となった。」とする本文の記述は、やや曖昧である。確かに、一六五〇年代の半ばまでは、鄭氏、特に鄭芝龍とその息子の鄭成功は台湾海峡におけるオランダ人に

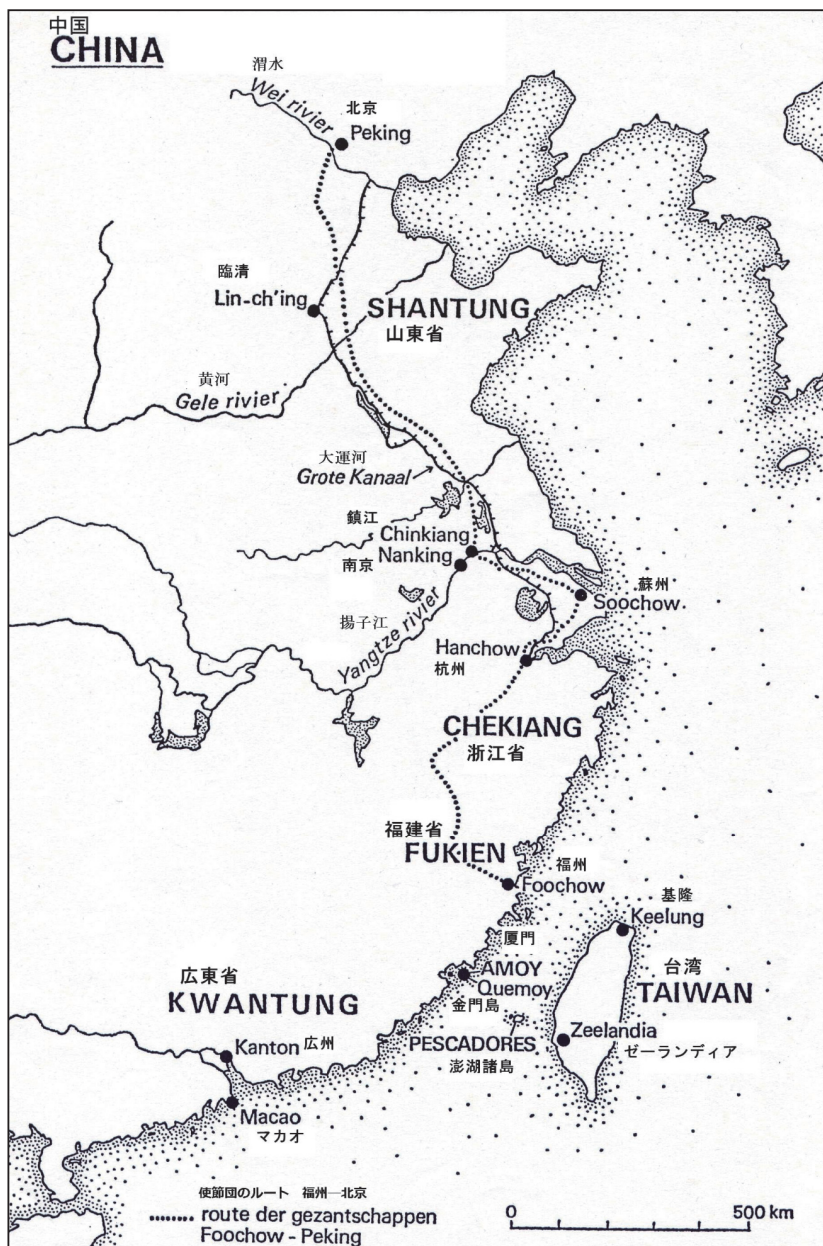
とって最も重要な貿易相手だった。しかし、鄭成功が、当時中国大陸を制圧しつつあった清朝に対する抵抗運動を組織し、それが激化するにつれて鄭氏とオランダとの関係も変化していく。そして一六六一年一二月に台湾におけるオランダの根拠地ゼーランディア城が鄭氏によって攻撃されたことにより、鄭氏とオランダとの関係は敵対関係へと決定的に変化するのである。

(viii) ヤハトは現在のヨットの語源だが、東インド会社では三本マストの快速船をヤハトと呼んだ。当時東インド会社が使用していた船種は他に重武装のスヒップ（英語のシップ、三本マストの大型船）と貨物輸送に特化した軽武装のフルートがあった。

(ix) ここでは現在の台南の外港である安平を指す。Tayowan (タイオワン) と呼ばれる先住民の集落があり、「台湾」という島名の由来となった。一六二四年、東インド会社は中国貿易の根拠地をタイオワンに移すことに決定し、同地で商館と城（一六二七年にゼーランディア城と改称）の築造を開始した。原文ではタイオワンを指す場合も台湾島を指す場合も「Taiwan」と表記されているが、訳文では前者を「タイオワン」、後者を「台湾」に統一する。なお、タイオワンの位置については付図2を参照。

## 付図

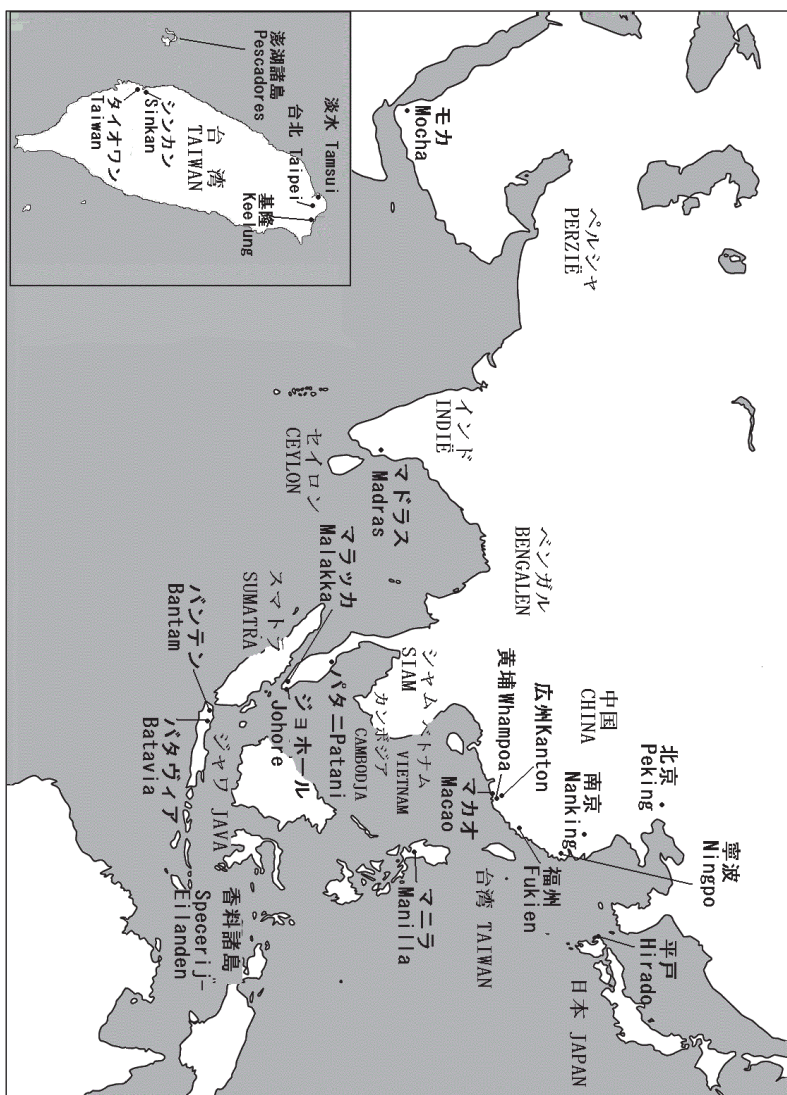
付図1「中国地図（福州・北京間の使節団ルート）」は、原文「最初の時期」の章に収録されていた図である。原文には付図1に記載されていない地名も頻出するため、付図2「東インド会社関係地図」を併せて掲載する。参照されたい。



付図 1 中国地図（福州・北京間の使節団のルート）

ジョン・E・ウィルズ Jr. 著 一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人（蘭ゼミ）





付図2 東インド会社関係地図

ジョン・E・ウィルズ jr. 著 一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人(蘭ゼミ)

【解題】

本稿にて翻訳した John E. Wills jr., *De VOC en de Chinezen in Taiwan, China en Batavia in de 17de en 18de eeuw* [ジョン・E・ウィルズ jr. 「一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人」] が収録された M. A. P. Meilink-Roelofs 編による *DE VOC IN AZIË* [アジアにおける東インド会社] について簡単に紹介する。

一九七六年にオランダで出版された本書は、東インド会社研究の大家として著名であった Meilink-Roelofs を編者とし、五人の研究者が現地の史料を使用し、東インド会社を中心としたオランダ人のアジアでの活動やその背景に焦点を当てたものである。

日本では、オランダはヨーロッパの国々の中で唯一江戸時代のほぼ全てを通じて日本との貿易を行ってきた国として有名である。しかし、オランダ国内におけるアジアの研究といえど、オランダが長期間支配していたインドネシアに関するものがほとんどであり、東インド会社のインドネシア以外での活動に着目したものは少なかった。本書ではインドに関する論文が三本と、セイロン島、マレー半島、中国、そして日本に関する論文が一本ずつ収められ、それぞれこれまで注目されてこなかった東インド会社のインドネシア以外での活動を記している。

本書は以下のような構成になっている。

Prof. dr. M. A. P. Meilink-Roelofs, *Inleiding* [序文]

Prof. dr. S. Arasaratnam, *De VOC in Ceylon en Coromandel in de 17de en 18de eeuw* [一七世紀および一八世紀のセイロンとコロマンデルにおける東インド会社]

Prof. dr. A. Das Gupta, *De VOC en Suratte in de 17de en 18de eeuw* [一七世紀および一八世紀の東インド会社とスーラト]

Drs. H. K. s'Jacob, *De VOC en de Malabarkust in de 17de eeuw* [一七世紀の東インド会社とマラバール海岸]

Prof. dr. A. Das Gupta, *De VOC en de Malabarkust in de 18de eeuw* [一八世紀の東インド会社とマラバール海岸]

Dr. L. Y. Andaya, *De VOC en de Maleise wereld in de 17de en 18de eeuw* [一七世紀および一八世紀の東インド会社とマレーの社会]

Prof. dr. John E. Wills jr., *De VOC en de Chinezen in Taiwan, China en Batavia in de 17de 18de eeuw* [一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人]

Prof. dr. M. Kanai, *Nederland en Japan 1602-1860* [日本とオランダ、一六〇二—一八六〇年]

以下では John E. Wills jr. 以外の著者による各論文について紹介する。

*Inleiding*, Prof. dr. M. A. P. Meilink-Roelofs

本書の編者でもある Meilink-Roelofs は一六世紀から一九世紀前半にかけてのアジア人とヨーロッパの関係を主な研究分野としていた。編者はもともとハーグにあるオランダ国立公文書館に務めており、そこで東インド会社に関する史料を担当し、アジアからの視点に着目してアジアへのオランダの進出に関する研究を進めた。東インド会社の記録に関する長期間の研究により、同氏は誰よりも東インド会社の歴史に精通するようになる。さらに、ヨーロッパ人の世界進出に関する史料



の詳細な研究の結果、同氏は東西インド会社研究の大家となった。この序文において、同氏はオランダではインドネシアの植民地史・経済史・農業史を除いてはさほど研究されていなかったことを指摘し、海外の研究者が東インド会社の現地商館について調べることが多いと述べている。

#### De VOC in Ceylon en Coromandel in de 17de en 18de eeuw

本論を担当した Arasaratnam は Melink-Roelofs が言及する海外の研究者の好例であろう。セイロン島出身の研究者である同氏は、オランダ国立公文書館の史料をもとに研究を進めた。同氏の代表的な著作 *Dutch Power in Ceylon, 1658-1687* はセイロン島におけるオランダ人の活動に関する研究で、貴重な成果を挙げた。本論においては、オランダの東方進出においてセイロン島が商業的、戦略的に重要な拠点であったとし、同島とインドのコロマンデル海岸におけるオランダ人の活動とその価値について述べている。

#### De VOC en Surat in de 17de en 18de eeuw

著者 Das Gupta は本書において、スーラトとマラバールに関する二本の論文を執筆している。同氏はインド西岸に位置するマラバールを主として研究しており、主著 *Malabar in Asian Trade 1740-1800* は東インド会社が斜陽となった時期のマラバールにおける活動に焦点を当てたものである。本論においてはマラバールの北に位置し、ムガル帝国の貿易港として栄えたスーラトにおける東インド会社の活動を扱っている。

#### De VOC en de Malabarkust in de 17de eeuw

著者 H. K. Jacob はオランダ人で、マラバールに関する研究者である。同氏は著書 *De Nederlanders in Kerala, 1663-1701* においてマラバール海岸地域の住民たちの経済的・社会的背景について論じている。本論においても同じく一七世紀の東インド会社とマラバールの関係に着目し、マラバールの支配者たちの争いの中で、漁夫の利を得た東インド会社の様子を記している。

#### De VOC en de Malabarkust in de 18de eeuw

本論は前述の Das Gupta が東インド会社とマラバールの関係について記したものである。一八世紀の東インド会社は斜陽になりつつあり、本論ではマラバールでのイギリス人との競争や現地社会への権力の移譲などについて述べている。

#### De VOC en de Maleise wereld in de 17de en 18de eeuw

L. Y. Andaya は東インド会社と同盟関係にあったジョホール王国に関する詳細な研究である *The kingdom of Johor, 1641-1728* の著者でもある。マレー半島を中心とした地域の東インド会社の活動は戦後のオランダではあまり関心を向けられていなかった。しかし、マラッカに商館を構えていた東インド会社にとって、この地は貿易上重要な寄港地であった。本論では、現地の海賊や戦争などに悩まされつつも秩序と平和を守ろうと苦慮する東インド会社の様子が描かれている。

#### Nederland en Japan 1602-1860

本論は日本における対外関係史、なかでも日蘭交流史を専門とする金井圓によって書かれた。同氏は東京大学史料編纂所の

海外史料部（現、特殊史料部門）に所属し、英蘭東インド会社の日本関係海外史料（欧米）の調査、翻訳を行い、主著として『日蘭交渉史の研究』（思文閣出版、一九八六年）がある。本論でも東インド会社の設立から出島オランダ商館の開館までを貿易と文化交流の両面から取り扱っており、日本における研究をオランダへ紹介するものとなっている。

（文責：岩井優典）

# 【翻訳の経緯】

本誌で紹介したのはオランダ語中級ゼミにて翻訳した文献の一つである。同ゼミではこれまで、*Femme S. Gastra, De geschiedenis van de VOC, walburg Pers, Zutphen*、「東インド会社の歴史」など、主にオランダ東インド会社およびバタヴィア（現、ジャカルタ）政庁時代のオランダ領東インドの歴史にかかわる研究書や論文を翻訳してきた（翻訳した文献の詳細は、本号の「史苑の窓」を参照）。その一貫として、東インド会社の東アジアにおける活動についてより深く知るべく、二〇一〇年一〇月から二〇一二年一〇月にかけて取り組んだのが、ここに掲載したジョン・E・ウィルス jr.「一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人」である。

翻訳作業は各回のゼミで一人一〜三段落ほどの訳を分担し、参加者全員で訳文を検討するという形で進められた。原文では、前掲 *De geschiedenis van de VOC* では詳しく触れられていなかった、東インド会社と東アジアの他の勢力との関係が具体的に著述されており、彼らに対するオランダ人の認識について示唆を与えられることが多かった。一方で、中国史・東南

アジア史の研究成果に鑑みて、解説を付した方が望ましいと思われる箇所も散見された。そのため、可能な限り原文を生かした訳文となるよう留意しつつ、必要に応じて訳注を付し、付図を掲載した。

なお、翻訳を分担したのは次の一〇名である（所属はゼミ参加時）。岩井優典・遠藤正之・久礼克季（立教大学大学院生）、鈴木昇司（立教大学大学院キリスト教研究科助手）、北村淳也（一橋大学大学院生）、戸森麻衣子（日本学術振興会特別研究員（PD））、福田舞子（鶴見大学大学院生）、矢田純子（お茶の水女子大学大学院生）、吉村雅美（日本学術振興会特別研究員（PD））、渡辺真由美（日蘭学会会員）。

本訳文が幅広い分野において活用されることを期待したい。